文化財愛護
シンボルマーク

北条町埋蔵文化財報告書 25

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

Sima
島遺跡発掘調査報告書

第２集

1998. 3

北条町教育委員会

鳥取県東伯郡北条町
Hōjō

島遺跡発掘調査報告書
Sima

第２集

1998. 3

北条町教育委員会

序　　文

ここ数年、文化財の保護意識が高まる中で、各種開発事業に伴う発掘調査により、先人の生活・文化が少しずつ明らかになりつつあることは大変に喜ばしいことであります。

しかしその反面、開発と文化財保護との調整が大変困難かつ重要となっており、本町としましても日々努力しているところであります。

北条町は、鳥取県中部を流れる天神川下流部西岸に位置する総面積２１㎢の小さな町ですが、丘陵部を中心に６００件もの古墳の存在が確認され、その密度は県下でも有数のものと考えられます。さらに、平野部一帯におきましても当時の繁栄の姿がうかがえる条里遺溝が広がっています。これらの文化遺産を後世に伝え、地域の生活文化の水準向上に資することが我々文化財保護行政の使命であると考えております。

ここに報告する島遺跡発掘調査は、一般国道３１３号道路改良工事に伴い行われたもので、北条町教育委員会が主体となり鳥取県土木部道路課及び倉吉土木事務所工務第一課をはじめ、地元関係者と綿密に連絡を取り合い協議を進めてまいりました。その結果、過去に行った島遺跡発掘調査同様、数多くの縄文土器を発見するに至り、当時の文化、生活の様相を知りうる手掛かりを得ることができました。

調査にあたって、鳥取県教育委員会文化課及び鳥取県埋蔵文化財センターのご指導はもとより地元作業員、その他調査関係者各位には多大なるご理解、ご協力を賜り、ようやく報告書を発刊することになりました。ありがたく感謝申し上げる次第でございます。

これを契機といたしまして、地域の生活文化水準向上に資する文化財の保護に一層力を注いでいく所存でありますので、今後とも各位のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

1998(平成10)年３月

北条町教育委員会
教育長　吉田俊夫

例　　言

1．本報告書は、平成８年度、一般国道３１３号道路改良工事に伴い、鳥取県土木部道路課の委託を受けて北条町教育委員会が主体となって実施した北条町島字五反田の埋蔵文化財発掘調査記録をもとに、平成９年度鳥取県倉吉土木事務所工務第一課の委託を受けて報告書作成したものである。

2．調査体制は以下の通りである。

調査団長　吉田俊夫（北条町教育委員会教育長）
調査指導　山枡雅美（鳥取県埋蔵文化財センター）
　　原田雅弘（鳥取県埋蔵文化財センター）
調 査 員　松本達之、宇田川　宏、西村勝義、日置粂左ヱ門
　　前田明範（以上北条町文化財保護委員）
　　清水直樹（北条町教育委員会教育課社会教育係主事）
事務担当　清水直樹
調査協力　中原由香里、宮前直美、坂本沙智

3．本書の執筆・編集は清水が行った。

4．遺構の実測・図面作成・写真撮影は調査に携わった全員の協力により清水、中原が、遺物の実測・遺構図・土器の浄書は清水、宮前、坂本が行った。

5．挿図１６・石皿実測図に示される矢印はスリ面を表す。

6．第５章「島遺跡における自然科学分析」は北条町教育委員会がパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して作成された。

7．本書に使用した方位は全て磁北を示す。

8．図面・写真・出土遺物等は北条町教育委員会が保管している。

目　　次

序　文
例　言
目　次
挿図目次・挿表目次・図版目次
第１章　調査に至る経過……1
第２章　位置と環境……3
第３章　調査の概要……4～8
第４章　出土遺物……9
第１節　縄文土器……9～26
第２節　その他の遺物……27
第５章　島遺跡における自然科学分析……28～33
第６章　まとめ……34
報告書抄録……35

挿　図　目　次

挿図１　島遺跡調査区位置図（１／5000）……1
挿図２　島遺跡調査区位置図（１／1000）……1
挿図３　北条町内遺跡分布図……2
挿図４　島遺跡調査区平断面図……5～7
挿図５　縄文土器ＣⅠ群～ＫⅠ群……10
挿図６　縄文土器ＫⅠ群～ＫⅦ群Ａ類……11
挿図７　縄文土器ＫⅦ群Ｂ類～ＫⅧ群Ａ類……15
挿図８　縄文土器ＫⅧ群Ｂ類……16
挿図９　縄文土器ＫⅧ群Ｂ類～ＢⅠ群Ｂ類……17
挿図10　縄文土器ＢⅠ群Ｂ類～ＢⅡ群……18
挿図11　無文精製縄文土器Ⅰ群～Ⅱ群……21
挿図12　無文粗製縄文土器Ⅰ群……22
挿図13　無文粗製縄文土器Ⅰ群～Ⅱ群……23
挿図14　無文粗製縄文土器Ⅲ群～Ⅴ群……24

挿図15　土製品実測図……27
挿図16　石皿実測図……27
挿図17　高杯型木器実測図……27
挿図18　木杭実測図……27
挿図19　花粉化石群集……31

挿　表　目　次

挿表１　縄文土器出土層一覧表……8
挿表２　島編年型式分類表……9
挿表３　縄文土器一覧表……25～26
挿表４　放射性炭素年代測定及び材同定結果……29
挿表５　花粉分析結果……30

図　版　目　次

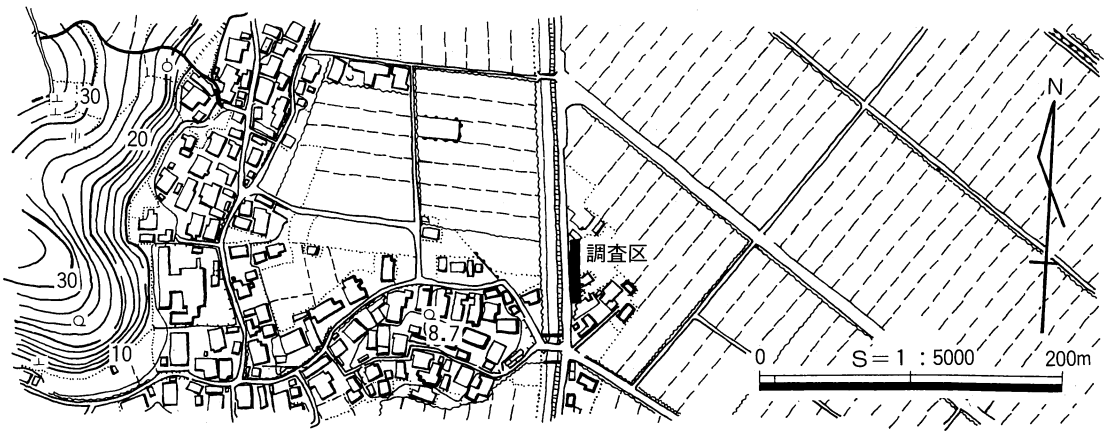
図版１　調査区遠景・近景・河道１・河道１断面・木の実のさらし場・河道４（第18層出土状況）・河道４調査区完掘
図版２　縄文土器ＣⅠ群～ＫⅤ群・縄文土器ＫⅦ群Ａ類～ＫⅦ群Ｂ類
縄文土器ＫⅧ群Ａ類～ＫⅧ群Ｂ類・縄文土器ＫⅧ群Ａ類
図版３　縄文土器ＢⅠ群～ＢⅡ群・無文精製縄文土器Ⅰ群・無文粗製縄文土器Ⅰ群
高杯型木器
図版４　花粉の顕微鏡写真
図版５　木材の顕微鏡写真
図版６　木材及び木の実の顕微鏡写真

第１章　調査に至る経過

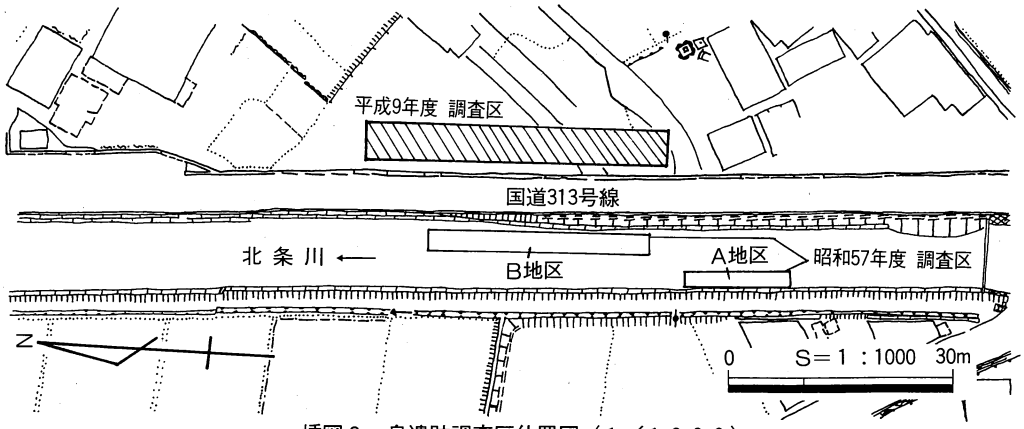
鳥取県中部を縦断し岡山県に通じる主要地方道国道３１３号線は、交通量に対し道幅が狭いことから道幅拡幅を目的とした一般国道３１３号道路改良工事を北条町島字五反田318－4において行いたい旨の協議が鳥取県土木部道路課より北条町教育委員会へあった。そこで両者、本工事予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から双方の事業において工事施工予定時期等と発掘予定箇所、そして調査体制等を考慮しながら調整を図るよう互いに確認しあった。

さらに、北条町教育委員会は鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターとこのことについて協議を行い、事前に実施した試掘調査結果を参考にして今回の発掘調査を実施することになった。

調査期間は、平成８年１２月３日から平成９年３月７日までとした。



挿図１　島遺跡調査区位置図（１／５０００）



挿図２　島遺跡調査区位置図（１／１０００）

A．島遺跡	1．曲古墳群	2．土下古墳群
3．やすみ塚（土下213号墳）	4．茶臼山古墳群	5．北尾古墳群
6．島古墳群	7．島苅山遺跡	8．北尾遺跡
9．曲226号墳	10．船渡遺跡	11．米里銅鐸出土地
12．米里第一遺跡	13．米里第二遺跡	14．天神川河床遺跡
15．宇ノ塚遺跡	16．殿屋敷遺跡	17．馬場遺跡
18．用露鼻遺跡	19．長畑遺跡	20．茶臼山要害
21．中浜遺跡	22．下神１号墳	23．曲宮ノ前遺跡
24．曲第一（岡）遺跡		

挿図３　北条町内遺跡分布図

第２章　位置と環境

北条町は鳥取県の中央部を流れる天神川を境にして、東は羽合町、西は大栄町、南は倉吉市と接しており、北部は日本海に面している。町域は、東西5.6㎞、南北4.7㎞、総面積20.99㎢の小さな町で、北部－北条砂丘、中央部－北条平野、南部－丘陵部の３地形から成っており、本町の遺跡分布状況、そして当時の様相もこの地域別にみてとれる。

砂丘地では、砂丘遺跡で有名な羽合町の長瀬高浜遺跡が近接するが、本町では、江北浜北野神社付近の河川工事の際、土師器、須恵器、土馬、銅鏡、鎧片などが出土し、下神及び弓原浜の採砂場からは、弥生土器、土師器片が出土していることから、砂丘地は弥生時代から古墳時代にかけての人々の生活の場であったことがうかがえる。

丘陵地においては、茶臼山古墳群、土下古墳群、北尾古墳群、島古墳群、曲古墳群など約６００基が存在する県下有数の古墳密集地であり、その中でも土下古墳群に含まれる土下２１０号墳及び、土下２１３号墳からは全国的にも貴重な鹿埴輪、鹿の子模様の入った人物埴輪が出土していることから、古墳時代の当地の繁栄がうかがえる。

平野部においては、今回調査を行った島遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。島遺跡は、北条町島付近を北流する北条川と平行する一般国道３１３号道路沿いに位置しており、昭和２７年の北条川改修工事の際に発見された遺跡である。当時、縄文遺跡の存在は目久美遺跡（米子市）、北灘遺跡（境港市）、青島遺跡（鳥取市）など数えるほどしかなく、縄文時代前期から晩期にまたがる土器をはじめ、石器、ニホンシカ、イノシシを主とした動物骨格片等の豊富な遺物の出土と相伴って山陰を代表する遺跡として脚光を浴びた。ただこの時点では工事による発見の為、遺跡の性格等は不明になっていた。昭和５８年の災害復旧工事に伴う島遺跡発掘調査によって多量の縄文土器のほか、石器や丸木舟、縄文貝塚等が発見され、特に縄文土器においては前期から晩期につながる山陰地方の土器編年がなされ、この地域の縄文遺跡としての重要性が注目され今日に至っている。また周辺の遺跡に目を向けると、北条川流域に位置する島遺跡の上流部には、縄文時代中期の土器片、ひきりうす、住居の用材とみられる木製品が検出された米里船渡遺跡が存在している。島、船渡の両遺跡が平野部と丘陵部の境界に位置していることは、北条平野が当時、縄文海進によってラグーンが形成されていたこと、そして貝塚・丸木舟が発見されたことから、このラグーンに面した湖岸に当地域が位置しており、ここで漁業、狩猟によって当時の人々の生活が営まれていたことが推測される。

北条町の遺跡分布状況は圧倒的に丘陵部における古墳が多いが、まだ埋もれた遺跡がたくさん存在することは、平野部に位置する島遺跡の立地状況からみても容易に推測できるところである。

第３章　調査の概要

今回の調査区は、昭和５７年に行われた島遺跡発掘調査で多量の縄文土器が出土したＢ地区の国道３１３号線を挟んで約９m東側に南北４０m、東西に５mの範囲で設定した。（挿図２）また、事前の試掘調査により遺物包含層が地表から約３m（海抜３m）の深部においても存在することが確認されたことから、工事用の矢板を調査区側面に打ち込み調査区を確保した。

調査区内は河川が近接することから湧水が著しく、排水溝を本地区の西側矢板沿いに作りつつ、また反対の東側矢板沿いにベルトを設定し、その断面から層を観察しながら海抜２mまで掘り下げた。遺物はレベルと平板を用いて行い、各層ごとの取り上げを行った。

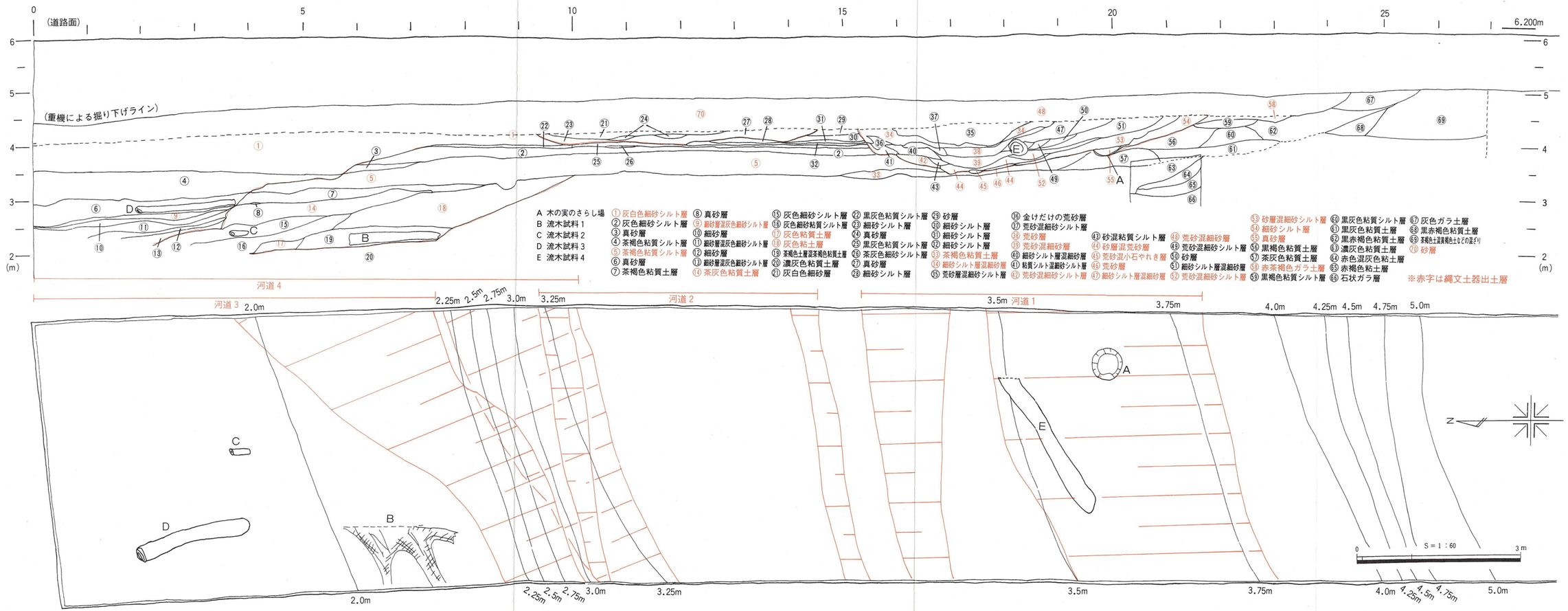
以上の方法による調査の結果、挿図４に示されるように幾度かの流水によるものと思われる堆積状況が見られたことから、調査区内にかつて自然河道が存在したと推測される。そこで挿図４を参照しながら、層位及び縄文土器の分布状況を河道別にふれてみることにする。但し、南端から北に向かって13mにかけての調査区については、重機によって１～1.2m下層（海抜約５m）まで表土を除去した際に土器の出土がなく、地山が露出したため省略してある。また、今回の調査区から出土した縄文土器はいずれも残りが良いとは言えず、これらの河川の流水によって上流から流されてくる際に摩耗したと考えられることも付け足しておく。

河道１　第34～55層の堆積で示される部分で、河床は海抜約3.5mであったと推測される。縄文土器の出土は、特に河底から南岸にかけての区域にあたる第45・52・54・58層に密集してみられ、河底を示す第45層においては縄文時代中期から晩期にかけての幅広い時期の土器が出土しているが、河道１内で出土した時代のわかる土器を総合的にみると、後期後葉のものがそのほとんどを占めた。

また、河道１の南岸において多量の木の実を包含した摺鉢状遺構が検出されており、その規模は南北軸58cm東西軸60cm深さ16cmを測る。この遺構の当時の位置であるが、土層堆積状況を観察すると河岸からすぐの水面下に存在していたと推測されることから、木の実を食する際に、あく抜きを行うためのさらし場であったと考えられる。なお遺構内から検出された木の実等の植物遺体については、第５章「島遺跡における自然科学分析」で触れる。

河道２　第21・23・24・27層の堆積で示される部分で、河床は海抜約４mであったと推測される。ここでは遺物の出土はなかったが、河道２より下層から縄文時代晩期の土器が出土していることから、晩期以降に形成されたものと推定される。

河道３　第１・４・６・９～13層の堆積で示される部分で、河床は海抜約2.2mであったと推測される。第１・９層から粗製土器が出土したが、年代のわかる土器は出土しなかっ



挿図 4　島遺跡調査区平断面図

た。しかしながら、第６層から検出された流木の放射性炭素年代測定から縄文時代晩期のものにあたる結果が得られている。

河道４　第７・８・14～19層の堆積で示される部分で、河床は海抜約２ｍであったと推測される。本河道内からは、縄文時代中期から晩期にかけての幅広い時期を示す土器が出土しており、出土位置については本河道の南岸にあたる第１８層から多量の出土をみた。また高杯型木器もこの層からの出土である。

挿表１　縄文土器出土層一覧表

時期 / 出土層位	前期	中期	後期			晩期	精製	粗製	合計
			前葉	中葉	後葉				
① 灰白色細砂シルト層						2	1	23	26
⑤ 茶褐色粘質シルト層								30	30
⑨ 細砂層混灰色細砂シルト層								9	9
⑭ 茶灰色粘質土層							1	2	3
⑰ 灰色粘質土層				1			2	22	25
⑱ 灰色粘土層		2	7	8	16	5	20	465	523
㉝ 茶褐色粘質土層					1		5	29	35
㉞ 細砂シルト層混細砂層								1	1
㊳ 荒砂層					2	1	3	55	61
㊴ 荒砂混細砂層						1	8	175	184
㊷ 荒砂混細砂シルト層								2	2
㊹ 砂層混荒砂層			2	1		2		3	8
㊺ 荒砂混小石やれき層		1	6	4	16	4	15	171	217
㊻ 荒砂層							2	13	15
㊼ 細砂シルト層混細砂層						1	1	14	16
㊽ 荒砂混細砂層					1			4	5
㊷ 荒砂混細砂シルト層			2		5		14	204	225
㊸ 砂層混細砂シルト層					4		9	36	49
㊹ 細砂シルト層			1		41	2	18	560	622
㊺ 真砂層							1	20	21
㊽ 赤茶褐色ガラ土層				1	35		11	340	387
㊿ 砂層						1		10	11
出土層不明					2	1	50	348	401
合　計		3	18	15	123	20	161	2,536	2,876

第４章　出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物には、縄文土器、土製品、石製品、木製品などがある。なかでも、縄文土器は発掘面積が狭い割にその数2,876点と多量の出土をみた。

第１節　縄文土器

今回出土した縄文土器は、ほとんどが細片であった為、器形の全体を推測できる資料は少ない。また、昭和５７年に行われた本遺跡の発掘調査では縄文時代前期から晩期まで全時期にわたる土器の出土があったが、今回の発掘調査ではそのほとんどが後期から晩期までのものに偏っており、前期の土器はまったくみられなかった。時期のわかる有文土器片数は中期３片、後期156片、晩期20片である。

・分類

すでに分類されている島編年、前期のＺⅠ～ＺⅣ群、中期のＣⅠ～ＣⅢ群、後期のＫⅠ～ＫⅧ群、晩期のＢⅠ群の型式に、今回新たに分類すべき土器が出土したことから、中期のＣⅣ群、晩期のＢⅡ群を付け加え縄文土器の分類を行った。但し、今回出土しなかった土器型式については本報告書での解説は省略する。下記の挿表２は島編年とそれに並行する型式を時期順に分類している。

無文の精製土器、粗製土器は共に出土した有文土器の時期からほとんど後期から晩期のものと推定されるが、その時期の有文土器との関係は明確にできなかった。

なお、縄文土器一覧表に各土器の出土地点と層位を示した。

挿表２　島編年型式分類表

各時期	前期						中期				後期														晩期		
											前葉			中葉										後葉				
各群	ＺⅠ群			ＺⅡ群	ＺⅢ群	ＺⅣ群	ＣⅠ群	ＣⅡ群	ＣⅢ群	ＣⅣ群	ＫⅠ群	ＫⅡ群	ＫⅢ群	ＫⅣ群				ＫⅤ群			ＫⅥ群	ＫⅦ群		ＫⅧ群		ＢⅠ群		ＢⅡ群
類	A	B	C				1～10	1～5						A	B	C	D	A	B	C		A	B	A	B	A	B	
型式名	羽島下層Ⅱ式		北白川下層Ⅰa式・北白川下層Ⅰb式		北白川下層Ⅱb式	大歳山式	船元Ⅰ・Ⅱ式		黒木Ⅱ式	北白川下層ｃ式	中津式（新）		福田Ｋ２式					北白川上層式	彦崎Ｋ２式		一乗寺Ｋ式	元住吉山Ⅰ式	元住吉山Ⅰ～Ⅱ式	元住吉山Ⅱ式	宮滝式	岩田第４類	刻み目土器群	突帯文土器群

・中期

これまでの島編年では中期の土器を、縄文地、条痕地、撚糸文を地文とするものでそれぞれＣⅠ・ＣⅡ・ＣⅢ群と分類していたが、地文なしで隆起線文により構成されるＣⅣ群を新たに分類した。今回の調査ではＣⅡ・ＣⅢ群にあたる土器は出土しなかった。

ＣⅠ群に属する出土土器（挿図５－１、２）

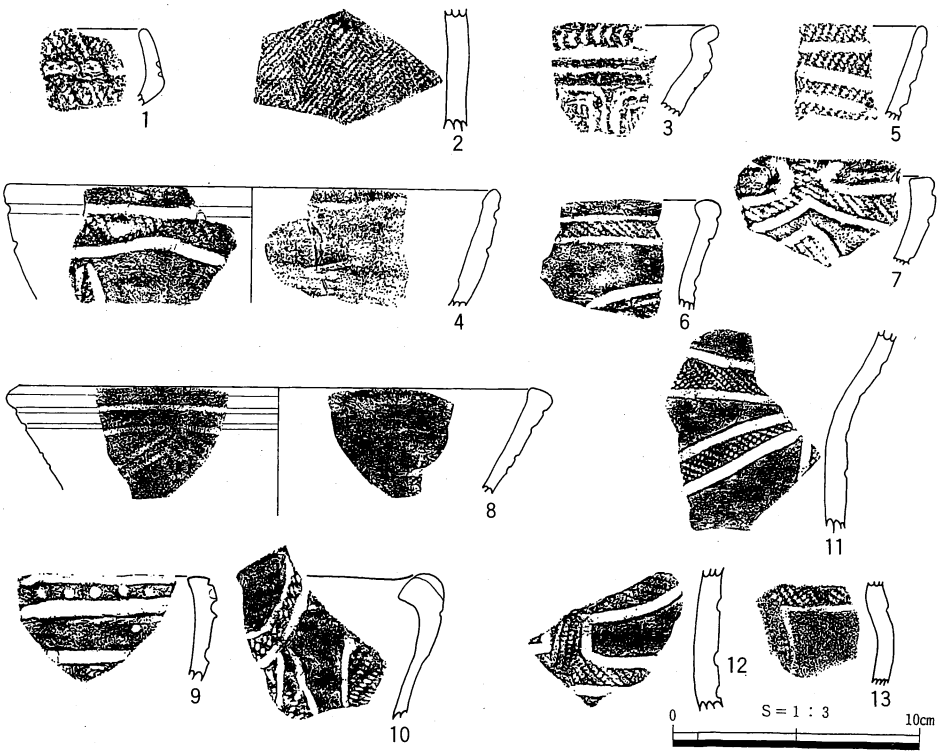
縄文地を地文とする土器群。

１は、ＲＬの縄文地に断面三角形の凸帯が貼り付けられ、その上部に径７㎜ほどの竹管状の円形刺突文が施されている。また凸帯の下部にもＲＬの縄文がみられる。２は、ＬＲの縄文地が施された器形不明の胴部である。内面調整は１・２共に、ナデ調整である。

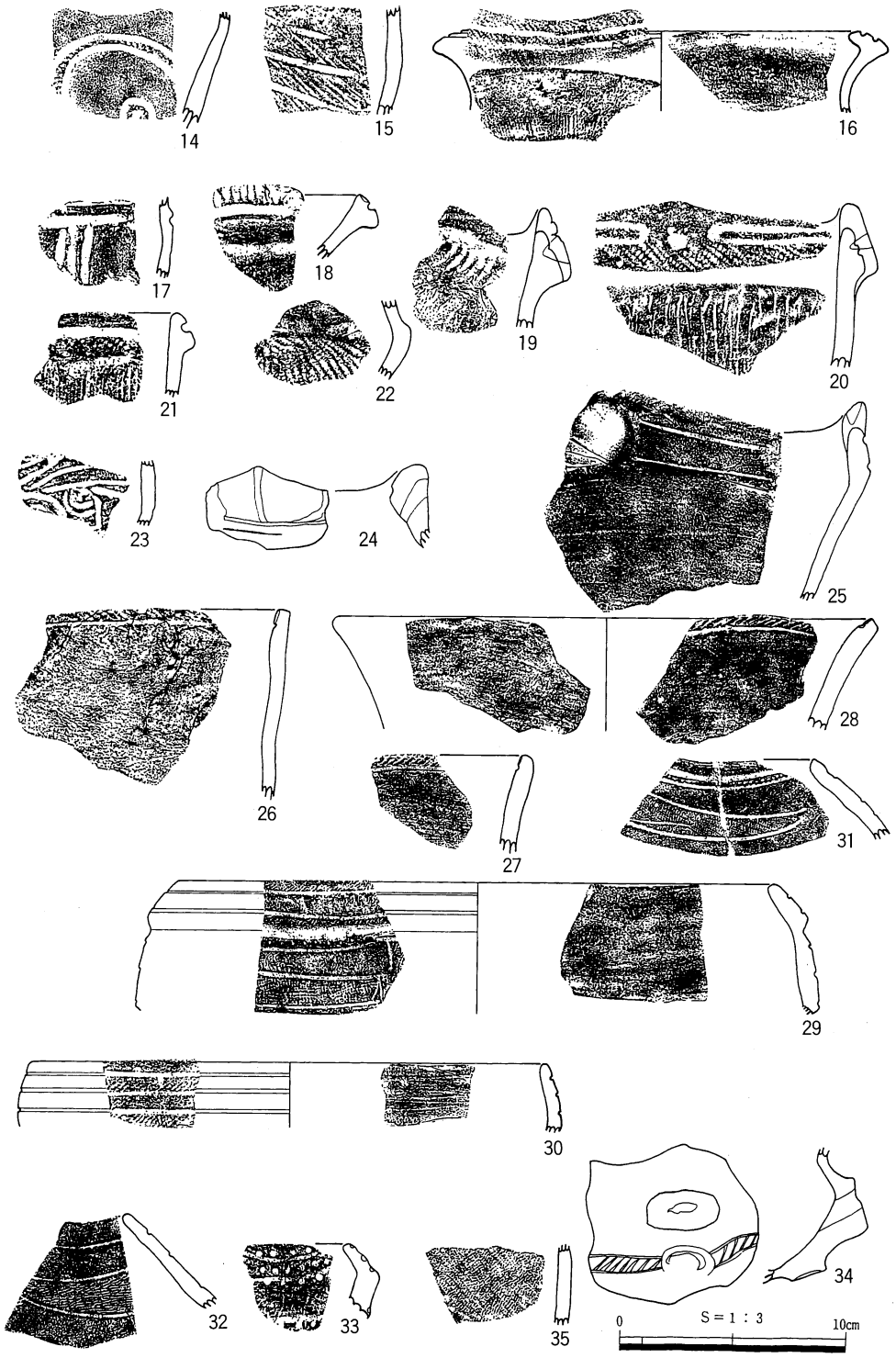
ＣⅣ群に属する出土土器（挿図５－３、図版２－１）

ＣⅣ群は、半裁竹管による隆起線文で文様が構成される土器を新たに分類したもので、北白川下層ｃ式に類似性を求めることができる。

３は口縁部が逆「く」字状に屈曲する土器で、口縁端部には刻みが施される。口縁部は、幅６～７㎜の隆起線文が横方向に一条めぐらされ、頸部には半裁竹管の内側を使った区画文が作られている。内面調整は、ナデ調整である。



挿図５　縄文土器ＣⅠ群～ＫⅠ群



挿図6　縄文土器ＫⅠ群～ＫⅦ群Ａ類

・後期

今回の調査で出土した有文土器では後期のものが最も多く156点にのぼる。但し、ＫⅡ、ＫⅢ、ＫⅥ群については、型式に当てはまる土器が出土しなかったため解説を省略する。

ＫＩ群に属する出土土器（挿図５、６－６～15、図版２－１）

太い沈線と幅12㎜前後の幅広の磨消縄文帯をもつ土器群で、中津式の新しい段階に位置すると考えられる。

外傾する口縁部をもつ土器で口縁端部が肥厚しないもの（４・５）と内側に若干肥厚しているもの（６～９）、緩く内湾する口縁部をもつ土器で口縁端部が肥厚するもの（10）がある。口縁部の形態は４～９が平縁口縁、10が波状口縁である。４・６は口縁部に沿って横帯文、その下部には波状文の磨消縄文帯が施される。５はＬＲの縄文地に横方向の沈線が刻まれている。７は口縁端部まで文様が及んでおり、その下部は波状文の磨消縄文帯が施される。８は口縁部に沿った横帯文の下部に「Ｊ」字状の縄文帯、９は口縁部に沿った沈線に並んで円形刺突文がみられる。10は波頂部に向かって内面に回り込む渦巻状の磨消縄文が施されている。内面調整は４が削り調整、５が磨き調整、７～９がハケ目状条痕、６・10がナデ調整である。

その他、ＫＩ群の時期に属すると考えられる頸部屈曲部（11）胴部（12～14）の破片はいずれも沈線で区画された磨消縄文帯がみられる。15は特殊な文様を持つ胴部破片で外面上部はＲＬの縄文、下部はハケ目状の調整が施され沈線が横方向に３本刻まれる。

ＫⅣ群に属する出土土器（挿図６－16・17、図版２－１）

口縁端部は逆「く」字状に肥厚し、外傾する頸部を持ち、頸部から胴部にかけては「く」字状に屈曲、胴部が張る深鉢型土器群で、肥厚した口縁部端面には、沈線・縄文・刻み目等が施される。頸部・胴部にはハケメ状条痕地や無地に、沈線や縄文で文様帯を構成する。布勢式に相当すると考えられる。

さらにＫⅣ群は、文様や形態等から次の４つに細分される。

・Ａ類　口縁端部はゆるく逆「く」字状に屈曲、頸部は若干内湾気味。頸部・胴部はハケ状条痕地に三本沈線の文様有り。
・Ｂ類　頸部はＡ類よりも外傾。口縁部端面に文様集約部分、頸部に沈線による文様有り。
・Ｃ類　頸部はＡ・Ｂ類よりも外傾し、文様なし。口縁部端面に文様の集約部分有り。
・Ｄ類　口縁部端面の集約部分が拡大。波状口縁。

16は平縁口縁で口縁端部が逆「く」字状に屈曲し、頸部がきつく外傾する。器面調整は、頸部にハケメ状条痕、口縁部端面全体にはＲＬの縄文が施され、二条の沈線が並行する。上の分類ではＣ類にあたる。17は土器の胴部で、ナデ調整の後に三本沈線が垂下する。

ＫＶ群に属する出土土器（挿図６－18～24、図版２－１）

いわゆる縁帯文土器群で、北白川上層式・彦崎ＫⅡ式に相当するものである。ＫＶ群は口縁部の形態から次の三つに細分される。

・Ａ類　口縁部が逆「く」字状に屈曲するなごりをもつ縁帯文を有する土器群。

・Ｂ類　口縁部内面に屈曲部を持たない縁帯文の土器群。

・Ｃ類　口縁部内面に文様帯を持つ土器群。

18は口縁部が逆「く」字状に屈曲していることからＡ類に属する深鉢で、口縁部端面に横方向の一条の沈線と、沈線から内側に向かってきざみが施される。調整は外面がナデ、内面が横ハケである。19～21は口縁部が段状に肥厚し、内面に屈曲部を持たない深鉢形土器でＢ類に属する。19は波状口縁を呈し、口縁部端面の波頂部には円形刺突文を中心に沈線による文様の集約部がみられる。頸部の器面調整はハケメ状条痕、内面はナデ調整が施される。20も波状口縁を呈し、口縁部端面の下部にはＲＬの縄文、上部には波頂部に円形刺突文と、それを避けるように沈線による区画文が施されている。沈線内には刺突がみられる。調整は、頸部がハケメ状条痕、内部はナデである。21は平縁口縁であり、口縁部端面には横方向の一条の沈線と、その下部にＲＬの縄文が施される。調整は頸部がハケメ状条痕、内部がケズリ状調整である。

その他ＫＶ群に属する胴部破片（22・23）、口縁端部（24）がある。22はＫＶ群に属する鉢の、頸部から胴部にまたがる屈曲部で、頸部にナデ調整、胴部にＲＬの縄文が施されている。23は幅２㎜程度の細い沈線のみで文様が構成されるもので他地域からの搬入品と思われる。24は波状口縁の波頂部に突起状に付くものと思われ、無文であるがＫＶ群の範疇に含まれるものであろう。

ＫⅦ群に属する出土土器（挿図６、７－25～46、図版２－２・３）

沈線によって文様を構成する土器群。施文された文様によって次の二つに分類される。

Ａ類　沈線内に円形の刺突文や沈線間に磨消擬縄文・刻み目・縄文が施される土器で器種には深鉢（25～28）、浅鉢（29・30）、注口土器（31～34）がある。元住吉山Ⅰ式に相当する。

25は、波頂部が肥厚し、上端内面に巻貝の先端で刺突文が施される。波頂部下部は張り付紋、口縁部外面には線端が刺突された二条の沈線、そして口縁端部上面には刻み目がみられる。26・27はやや外傾、28は外反する口縁部を持つ深鉢で、口縁部内面に沈線がまわり、沈線と口縁端部の間に細かい刻み目が入る。いずれも口縁端部は四角く仕上げられる。29・30は、頸部が逆「く」字状に屈曲する浅鉢と考えられる。29は口縁部の擬縄文による施文の他、沈線上に連続して刺突文、その下部には巻貝の回転施文による磨消擬縄文が施される。30は細い沈線で区画された間にＲＬの縄文を施すものである。31・32は内傾した

口縁部を持つ注口土器で、沈線内に連続して円形刺突文、その下部には回転施文による磨消擬縄文（31）と、貝殻復縁を押圧し、刻み目状に施した磨消擬縄文（32）を持つものがある。31の表面は良く磨かれている。33は口縁部が逆「く」字状に屈曲した注口土器で沈線間に連続して円形刺突文が施される。34は注口下部に中央を押圧した粘土瘤が張り付けられ、そこから刻み目を挟んだ二条の沈線が胴部をまわる。35は巻貝の回転施文による磨消擬縄文が施された胴部破片である。

B類　沈線と刻み目が施される土器で、器種には深鉢と浅鉢がある。元住吉山Ⅰ・Ⅱ式に相当すると考えられる。

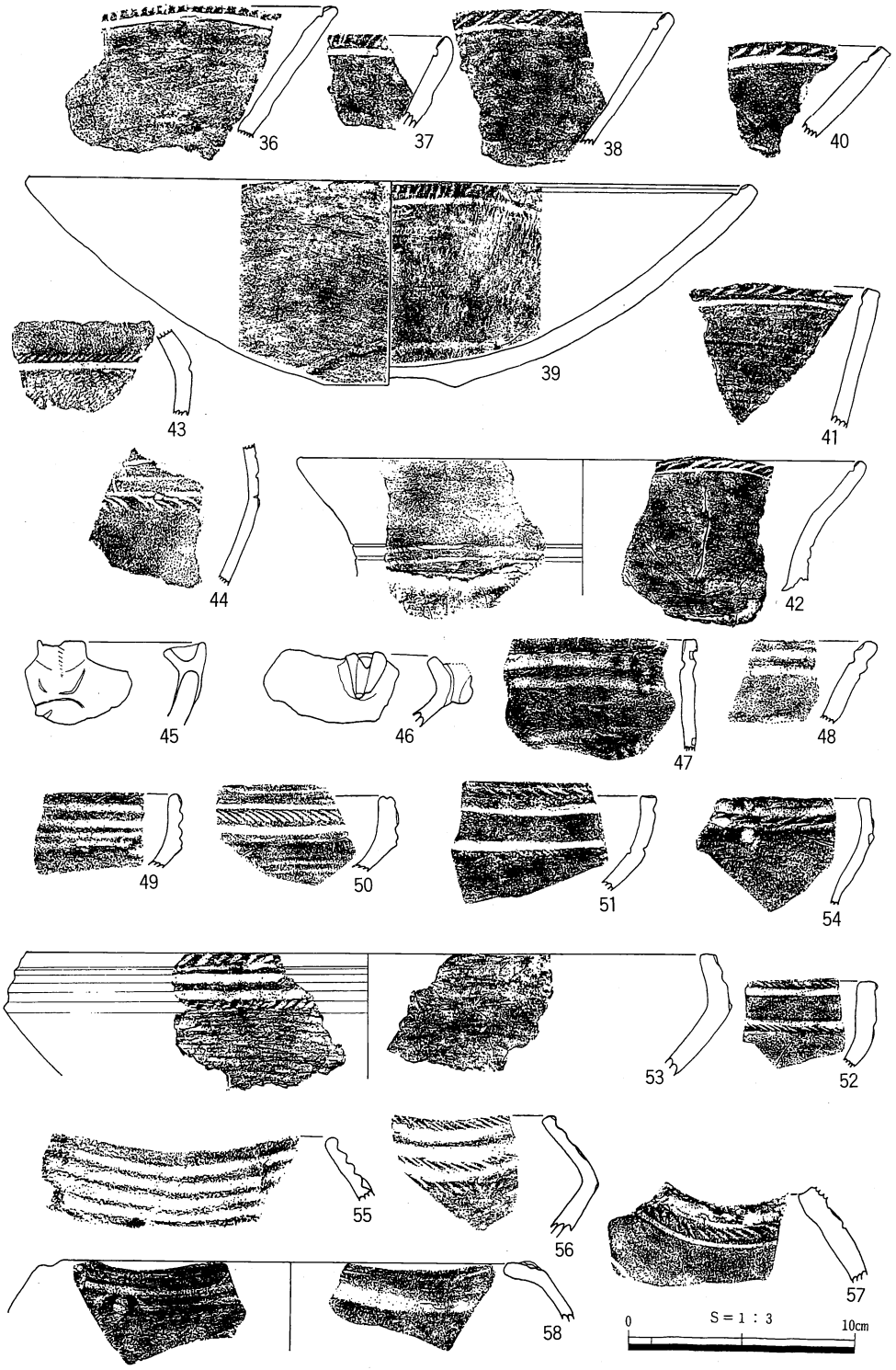
36～40は浅鉢の口縁部にあたる土器片で、口縁部内面に一条の沈線をめぐらし、沈線と口縁端部の間に刻み目が施される。口縁端部は丸く仕上げられているもの（36～38）と角ばるもの（39・40）がある。41は外傾する口縁部を持つ深鉢、42は外反する口縁部を持つ深鉢で、やはり口縁部内面に一条の沈線をめぐらし、沈線と口縁端部の間に刻み目が施されるほか、42は頸部外面に二条の沈線がみられる。43・44はKⅦ群B類に属する土器の胴部で、43は巻貝を使った擬縄文、44は沈線内に刺突文が施されている。45は口縁部に取り付けられた酒盃状突起で、その下部に沈線と刻み目による文様が施されている。46は胴部に取り付けられた取っ手で、上から円錐状の工具によって取っ手が貫かれている。外面調整は37・40がハケメ状条痕、39がヘラ状工具による削り、その他はナデである。

KⅧ群に属する出土土器（挿図７～９－47～70、図版２－４）

幅４～７㎜の凹線によって文様が構成される土器群。施文された文様により次の二つに分類される。

A類　雑な刻み目・輪状の貼り付文・瘤状の貼り付文が凹線間や凹線内に施される土器。器種には深鉢（47）、浅鉢（48～56）、注口土器（57・58）がある。元住吉山Ⅱ式に相当する。

47は口縁部が直立する深鉢である。外面は口縁部と胴部に各二条の凹線が施され、凹線上に円形刺突文と巻貝側面の圧痕文がみられる。また、口縁部内面には荒い刻み目が施される。48は口縁部が外傾する浅鉢で、外面は口縁部に沿う二条の凹線、内面は沈線と粗い刻み目が施される。49～52は口縁部が逆「く」字状に屈曲して直立する浅鉢で、口縁部外面あるいは端面上部に凹線と刻み目で文様が施される。53～56は口縁部が逆「く」字状に屈曲して内傾する浅鉢で凹線と刻み目による文様のほか、54は口縁部外面に巻貝側面圧痕文、55は輪状の貼り付紋が施される。57・58は注口土器で、57は内側に向かって屈曲した口縁部に沿って二条の沈線がめぐり、その間に刻み目が施され丁寧に磨かれている。58は沈線上に輪状の貼り付紋がみられる。



挿図７　縄文土器ＫⅦ群Ｂ類～ＫⅧ群Ａ類

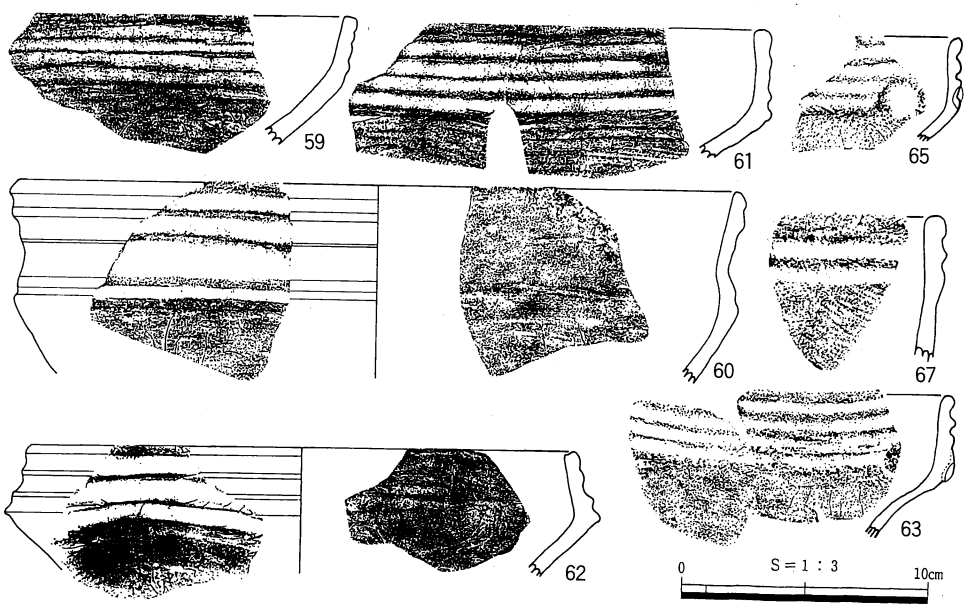
B類　凹線以外はほとんど文様が施されない土器。中には刻み目を施すものもあるが、施し方が粗い。器種には浅鉢（59～66）、鉢（67～70）がある。宮滝式に相当する。

59～66は口縁部が逆「く」字状に屈曲して立ち上がる浅鉢である。59～61は、口縁部に幅5～7㎜の凹線四条のみで文様が構成される。62は口縁部に幅7～8㎜の三条の凹線が施され、肩の張り出し部に巻貝端部を側面押圧している。63・64は口縁部の凹線の他、肩の張り出し部に輪状の貼り付文が施され、その中に円形刺突文が押される。65は幅4～5㎜の凹線の他、凹線上に巻貝の扇状圧痕文が施される。66は波状口縁を呈し、口縁端部と肩部に並んで巻貝による扇状圧痕文、肩部上面に沈線と粗い刻み目が施され、沈線の先端には円形刺突文が押される。67は直立する口縁部を持つ鉢で、幅8㎜の凹線二条が口縁部にならんで施される。68は口縁部が内湾する鉢で、幅5㎜の凹線四条が口縁部にならんで施される。69・70は鉢の胴部にあたる土器片で、共に凹線と、69は輪状の張り付け文、70は巻貝による扇状圧痕文がみられる。

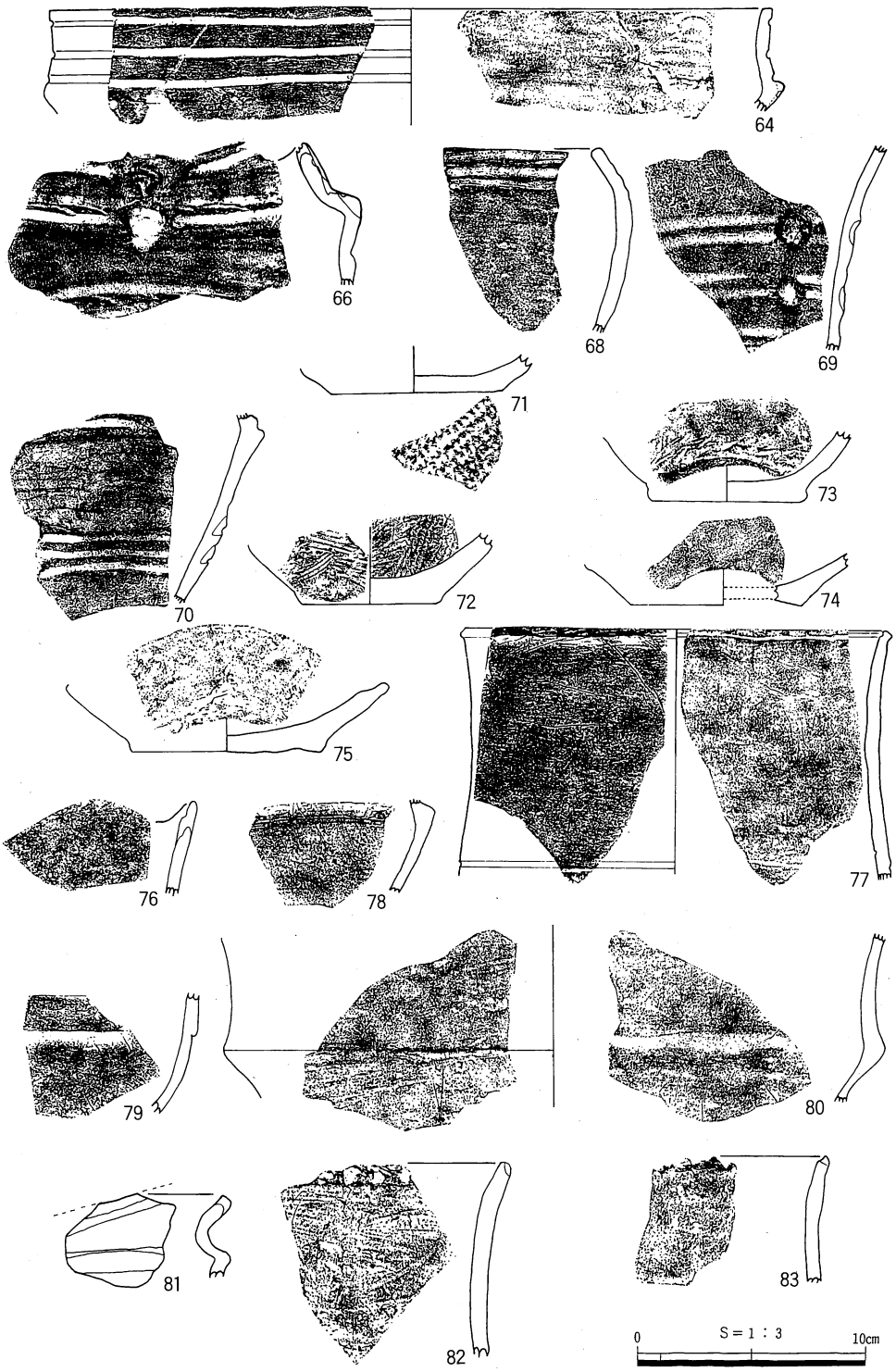
後期に属する土器底部（挿図9－71～75）

平底のもの（71～73）とあげ底のもの（74・75）がある。

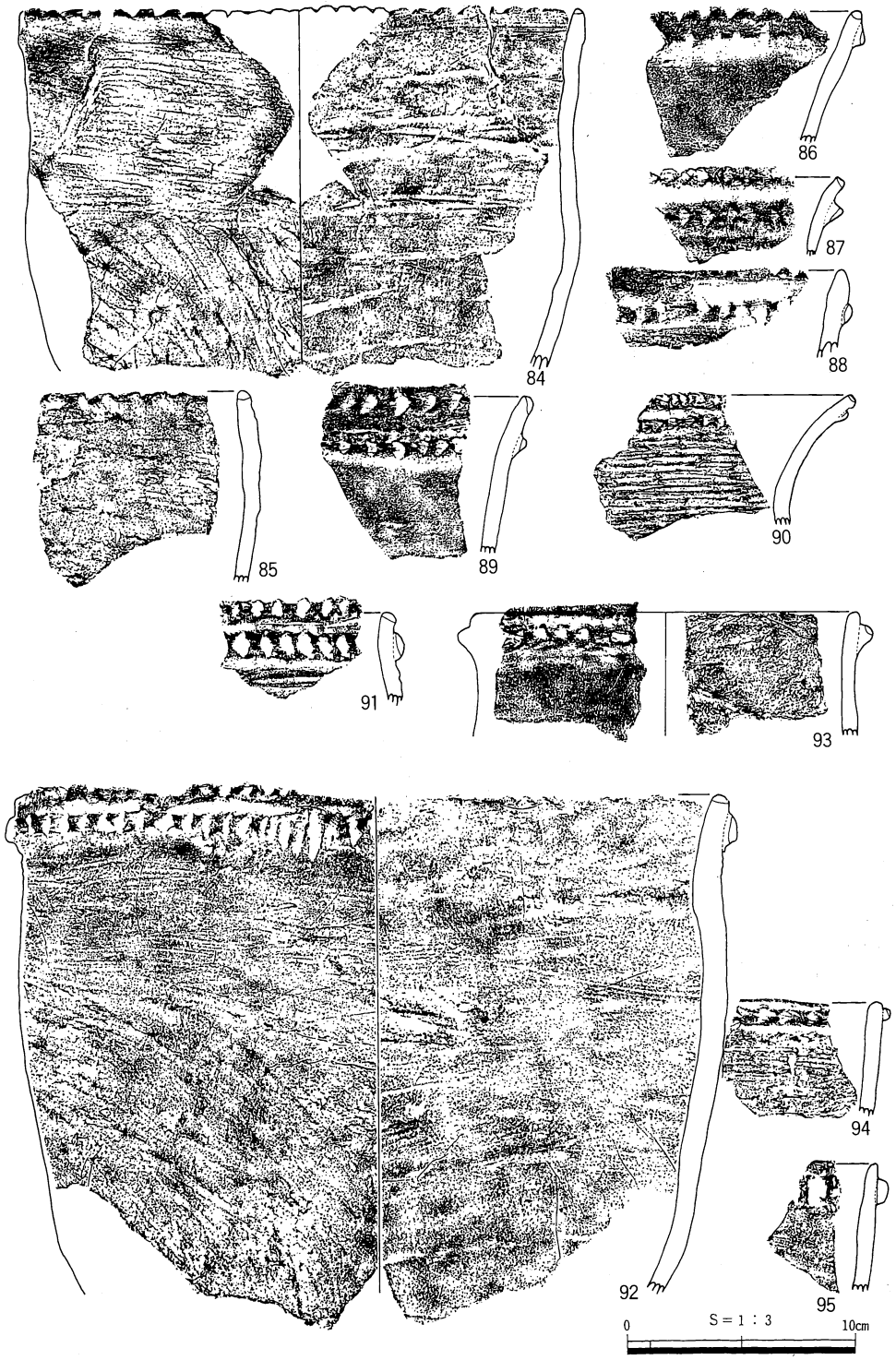
外面調整は、条痕調整のもの（71・72・75）、粗いナデ調整のもの（73）、ヘラ磨き調整のもの（74）がある。さらに条痕が施される底部には網代圧痕がみられるもの（71）、ハケメ状条痕がみられるもの（72・75）があり、これらの調整・文様から71はＫⅠ群にあたる土器の底部、72・73はＫⅦ・Ⅷ群の底部と考えられる。



挿図8　縄文土器ＫⅧ群Ｂ類



挿図９　縄文土器ＫⅧ群Ｂ類～ＢⅠ群Ｂ類



挿図10　縄文土器ＢⅠ群Ｂ類～ＢⅡ群

・晩期

これまで島編年での晩期の土器は、岩田第４類に並行する土器のみをＢⅠ群として唯一扱っていた。しかし、今回の調査で新たに口縁部に刻み目を有する土器群、そして口縁部外面に凸帯を有するいわゆる凸帯文土器群が出土したため、ＢⅠ群の中で岩田第４類に並行する土器群をＡ類、口縁部に刻み目を有する土器群をＢ類と細分化し、さらに凸帯文土器群をこれらより新しいＢⅡ群として扱うことにする。

ＢⅠ群に属する出土土器（挿図９・10－76～85、図版３－１）

Ａ類　岩田第４類に相当する土器群。深鉢（76～79）、浅鉢（80）がある。76は、波状口縁の深鉢で口縁部内面に凹線を施し、内外面ヘラ磨きが施される。77は外反する口縁端部をもつ深鉢で、端部内面に一条の沈線がまわり、内外面ともヘラ磨き調整である。78・79はいずれも深鉢の頸部で、78は口縁部が「く」字状に屈曲して立ちあがり頸部に平坦な段を有するもの、79は下部に向かって段を有するものである。78・79とも内外面ヘラ磨きが施される。80は口縁部が「く」字状に屈曲して立ちあがる浅鉢で、内面と口縁部外面がヘラ磨き調整、胴部は横ナデ調整である。81は波状口縁を持つと考えられる器形不明の土器である。頸部で内側に湾曲し、口縁部が外反するもので、調整は頸部外面がヘラ削りで他はナデが施される。

Ｂ類　口縁端部上面に刻み目を持つ土器群。いずれも深鉢型土器で口縁部が外反するもの（82～84）とやや内傾するもの（85）がある。口縁端部の刻み目は82が貝、83・85は半裁竹管状の工具によるもの、84がヘラ状の工具によって施されている。外面調整は82～84はハケメ状条痕、85はナデである。

ＢⅡ群に属する出土土器（挿図10－86～95、図版３－１）

口縁部外面に凸帯が取り付けられた土器群が新たに出土したためＢⅡ群を設け、これを分類した。器種は深鉢型土器で、口縁端部の形態から次のように細分した。

ａ．口縁端部上面に刻み目があるもの（86～92）

87、90は口縁が外反する深鉢、86・88・89・91・92はバケツ形の深鉢である。凸帯上と口縁端部の刻み目は、86～88はヘラで施され、89～91は貝で施されている。92は、ヘラと貝の両方を使用して刻み目が施される。外面調整は86・87・89がナデ、88・90・91がハケメ状条痕、92がヘラ削りである。

ｂ．口縁端部上面に刻み目がないもの（93～95）

93～95はいずれもバケツ形の深鉢である。凸帯上の刻み目は、93・94は貝で施されており、95はヘラによって凸帯が分割されるところまで深く刻み込まれる。調整は93・95が内外面ナデ、94は外面が粗いハケメ状条痕、内面は横ハケとなっている。

・無文精製土器

Ⅰ群に属する出土土器（挿図11－96～98、図版３－２）

ヘラ磨きを施し内湾したり、肥厚したり、段を有する口縁部を持つ土器群。今回出土した土器片の器種はいずれも鉢であった。

96は口縁端部が内湾し、内外面とも良くヘラ磨きが施してあり、頸部が屈曲し胴部が張る器形と考えられる。97は口縁端部が肥厚する土器で、内面には条痕がみられる。98は口縁部が外反する土器で、口縁端部内面に段を有し、内外面とも良くヘラ磨きが施される。

Ⅱ群に属する出土土器（挿図11－99～102）

内外面が良くヘラ磨きされている土器で浅鉢（99）、深鉢（100・101）、皿（102）がある。

99は肩部が「く」字に屈曲し、頸部から口縁端部にかけてゆるく外反する。口縁端部は四角く仕上げられ、底部は丸底である。100は肩部が「く」字に屈曲し、口縁部が外側に立ち上がる。器形は丸底を持つ壺型土器と推測される。101は胴部から口縁部にかけて垂直に立ち上がるバケツ型土器と考えられ、口径は30㎝前後である。102は口縁端部が尖り気味に仕上げられ、内側になだらかに湾曲した皿である。

・無文粗製土器

外面の調整方法に観点を置き、大きく５つに分類した。

Ⅰ群に属する出土土器（挿図12・13－103～106）

外面調整に指ナデによる幅１.２㎝の擦痕が認められる土器。

ａ類　内面に同じ調整痕が施される土器（103・104）。103はバケツ型の深鉢、104は口縁部内側に凸帯が張り付けられた浅鉢である。

ｂ類　内面にナデ調整が施される土器（105）。口縁部がゆるく内湾する鉢で、口縁端部は四角く仕上げられる。

ｃ類　内面にハケ目状条痕が施される土器（106）。口縁部がゆるく内湾する鉢で、口縁端部に向かうにしたがってうすくなる。

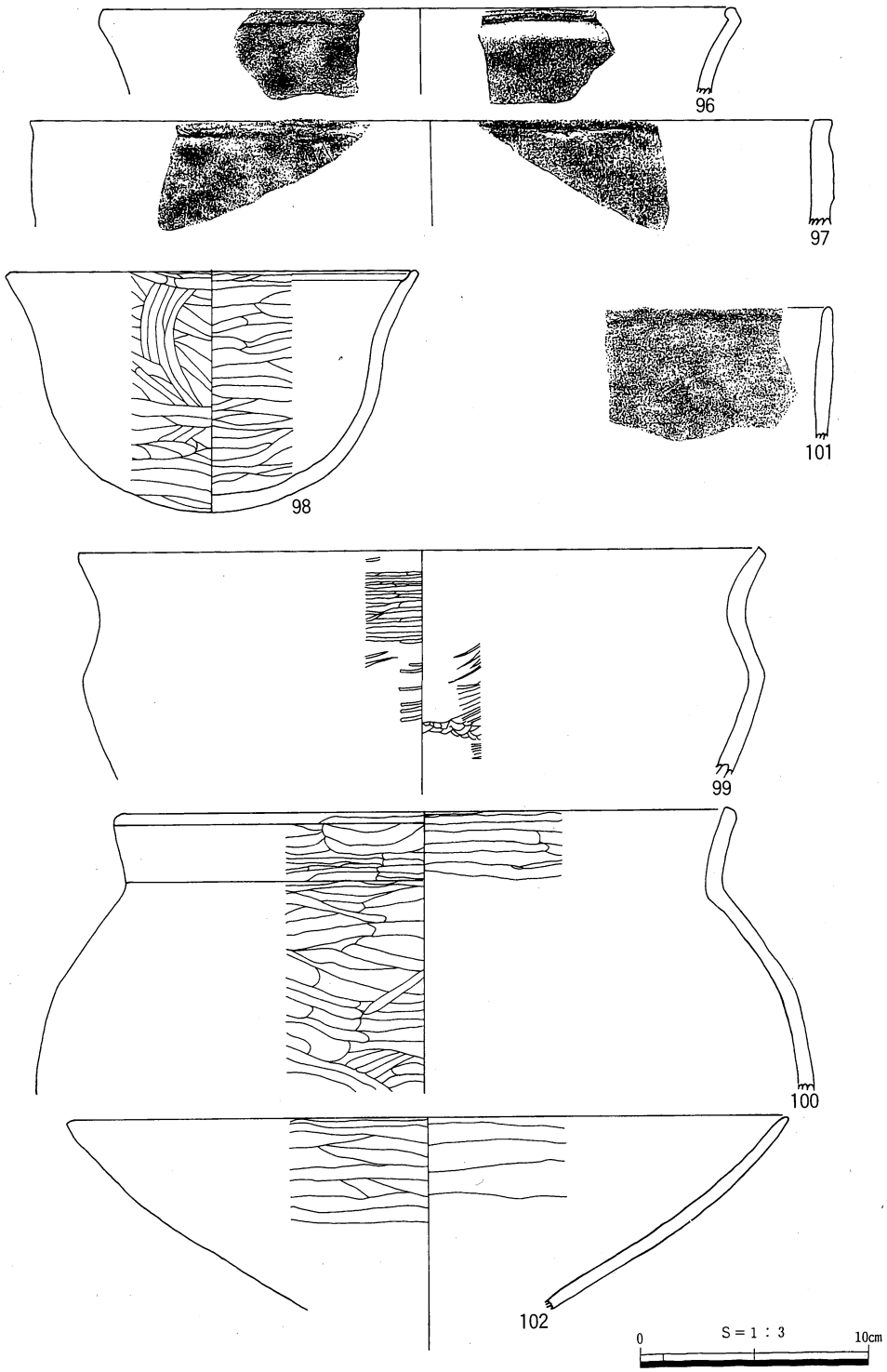
Ⅱ群に属する出土土器（挿図13－107～109、図版３－３）

外面の調整が板状工具によるもので、ヘラ削り状の痕跡が認められる土器。

ａ類　内面に同じ調整痕が施される土器（107）。口縁部が丸い、バケツ型の深鉢である。

ｂ類　内面にハケ目状条痕が施される土器（108）。口縁部がやや内湾し、端部が尖り気味に仕上げられた深鉢である。

ｃ類　内面にナデ調整が施される土器（109）。胴部がやや張り気味の深鉢で、口縁端部は四角く仕上げられる。



挿図11　無文精製縄文土器Ⅰ群～Ⅱ群

Ⅲ群に属する出土土器（挿図14－110・111）

外面の調整が横ナデ調整される土器。

a類　内面に同じ調整痕が施される土器（110）。口縁端部が四角く仕上げられたバケツ型の深鉢である。

b類　内面にヘラ磨き調整が施される土器（111）。口縁部が外傾する土器。頸部が「く」字に屈曲し、肩部がゆるく張り出した底部へとつながるタイプの深鉢と推測される。

Ⅳ群に属する出土土器（挿図14－112～114）

外面の調整にハケメ状条痕が施される土器。

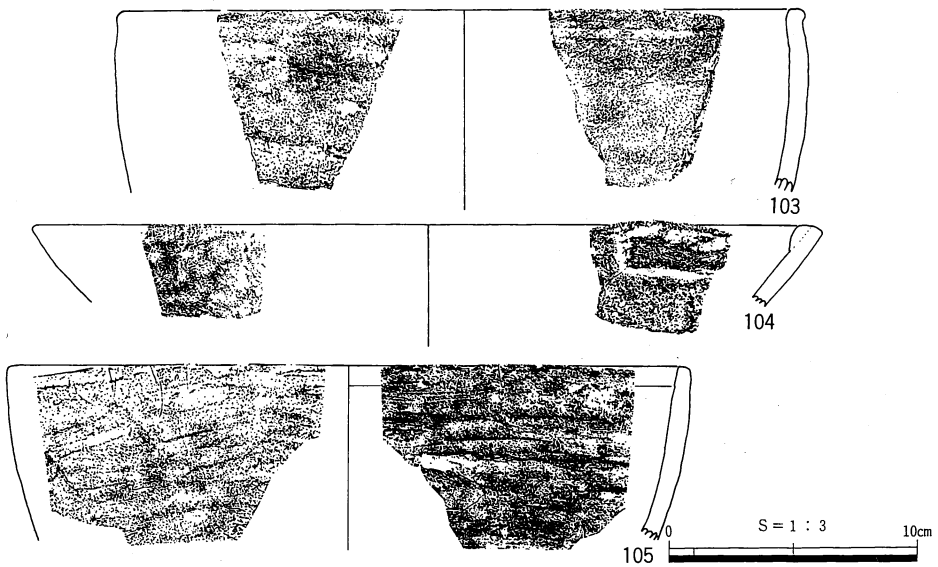
a類　内面に同じ調整痕が施される土器（112・113）。112は外傾し、広がる口縁部を持つ深鉢。端部の仕上げはいびつで粗い。113は肩部にあたる土器片で、張り出した部分に並んで貝による刻み目が施されている。

b類　内部に横ナデ調整が施される土器（114）。口縁部がやや外反し、端部は丸く仕上げられた深鉢である。

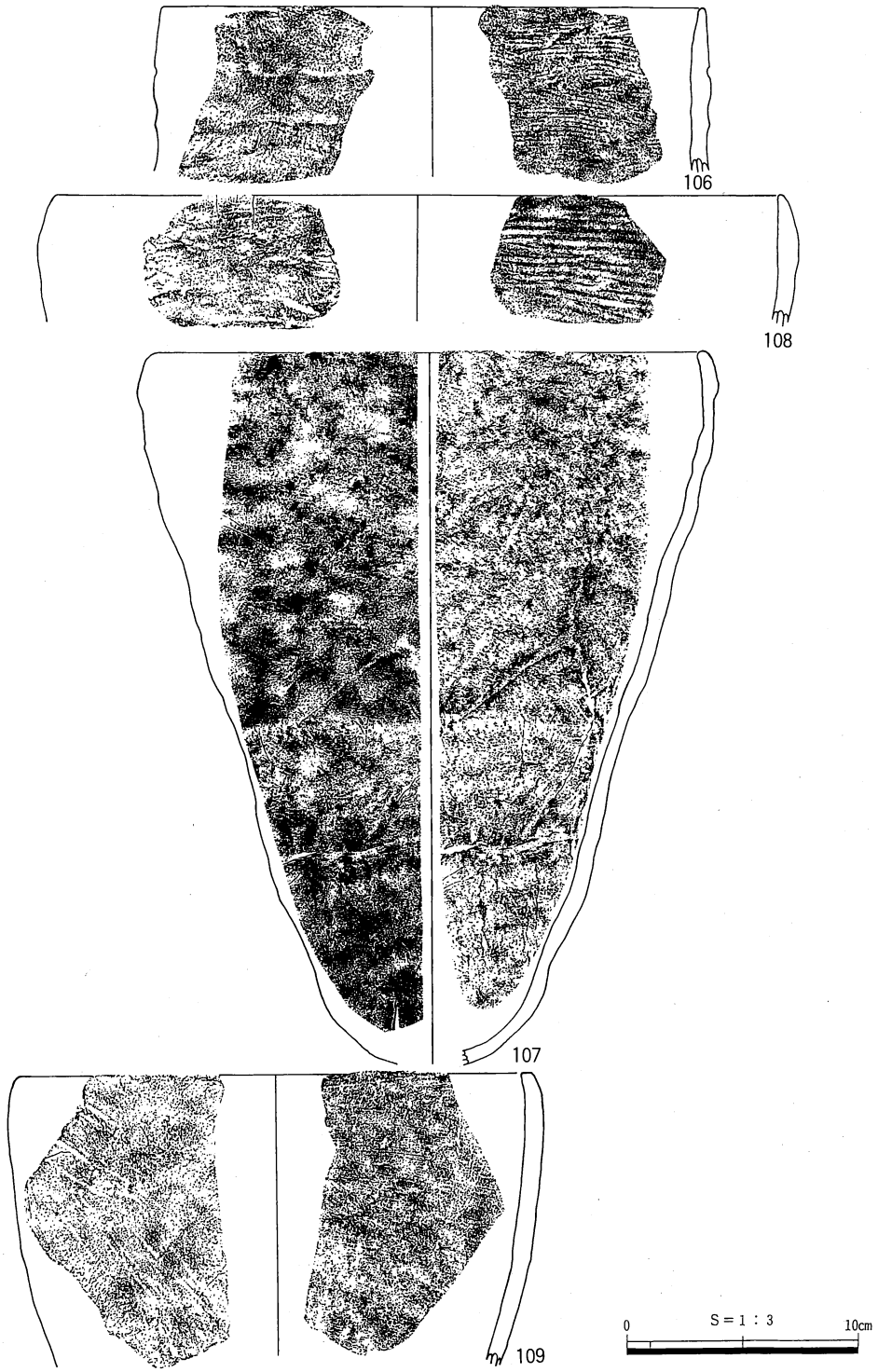
Ⅴ群に属する出土土器（挿図14－115）

内外面にヘラ磨き調整痕が施される土器（115）。

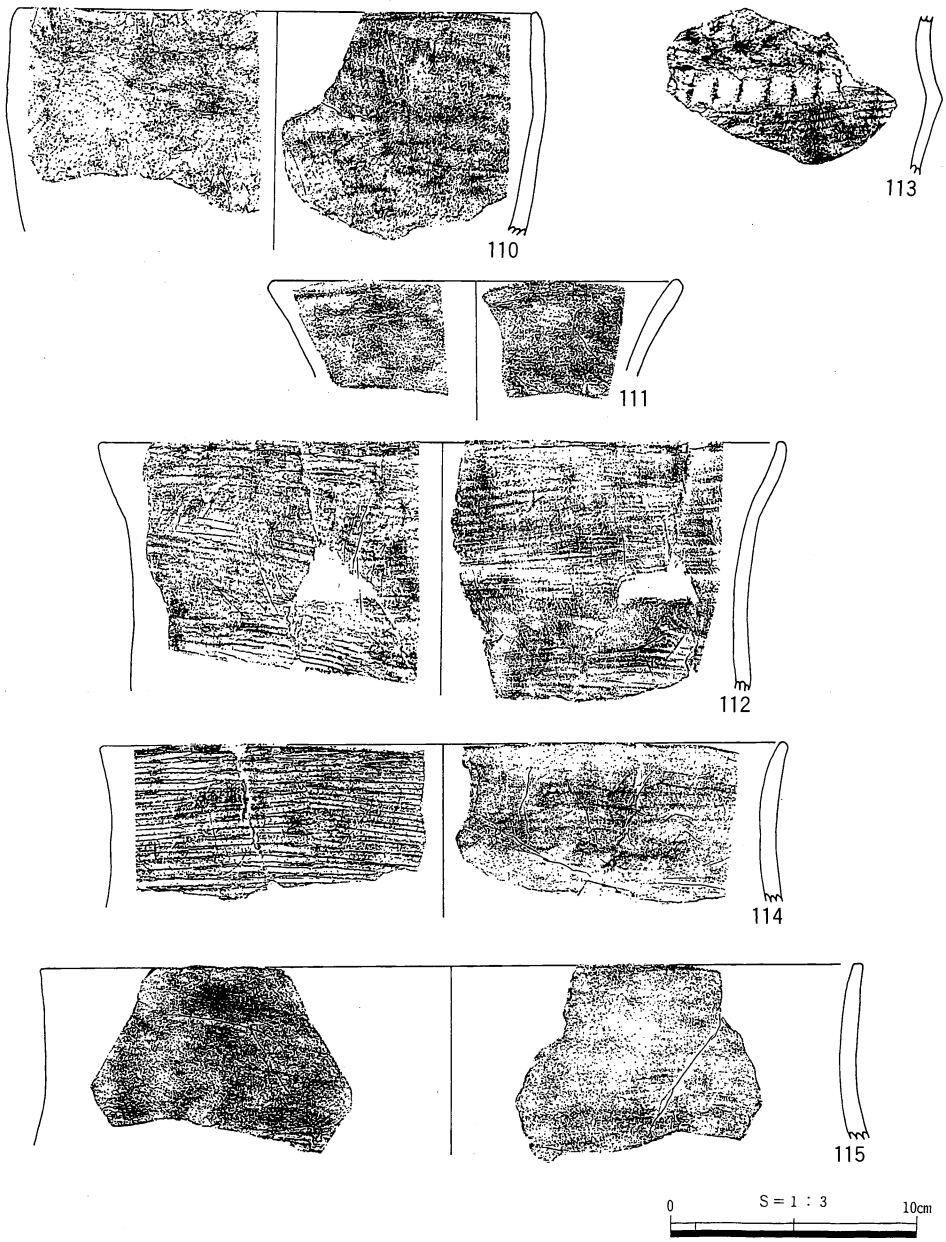
115はやや外反する口縁部を持つ深鉢で、端部は四角く仕上げられる。外面全体及び口縁部内面は横方向にヘラ磨きされ、頸部内面はヘラ削りが施される。本来なら無文精製土器Ⅱ群に入るべきかもしれない。



挿図12　無文粗製縄文土器Ⅰ群



挿図13　無文粗製縄文土器Ⅰ群～Ⅱ群



挿図14　無文粗製縄文土器Ⅲ群～Ⅴ群

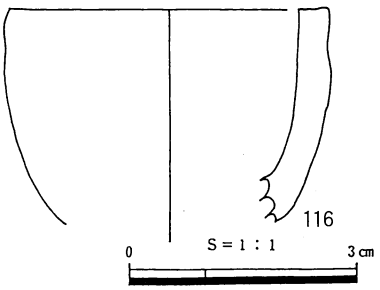
挿表３　縄文土器一覧表

群・類	遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	備考（cm）	群・類	遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	備考（cm）
ＣⅠ群	1	5		第18層		ＫⅦ群A類	30	〃		第18層	口径23
〃	2	〃		第45層		〃	31	〃	2—2	第54層	
ＣⅣ群	3	〃	2—1	第18層		〃	32	〃	2—2	第45層	
ＫⅠ群	4	〃	2—1	第45層	口径20	〃	33	〃	2—2	第58層	
〃	5	〃		〃		〃	34	〃	2—2	第54層	
〃	6	〃		〃		〃	35	〃		〃	
〃	7	〃	2—1	第18層		ＫⅦ群B類	36	7	2—2	第52層	
〃	8	〃	2—1	〃	口径20.6	〃	37	〃		第53層	
〃	9	〃	2—1	第45層		〃	38	〃	2—2	第38層	
〃	10	〃	2—1	第44層		〃	39	〃	2—3	第54層	口径32
〃	11	〃		第54層		〃	40	〃		第44層	
〃	12	〃		第18層		〃	41	〃		〃	
〃	13	〃		〃		〃	42	〃		第45層	口径24.7
〃	14	6		〃		〃	43	〃	2—2	第58層	
〃	15	〃	2—1	第45層		〃	44	〃		〃	
ＫⅣ群	16	〃	2—1	第18層	口径17	〃	45	〃	2—2	第18層	
〃	17	〃	2—1	第17層		〃	46	〃		〃	
ＫⅤ群	18	〃	2—1	第18層		ＫⅦ群A類	47	〃	2—4	第54層	
〃	19	〃		〃		〃	48	〃		〃	
〃	20	〃	2—1	〃		〃	49	〃		〃	
〃	21	〃		〃		〃	50	〃		第45層	
〃	22	〃		第45層		〃	51	〃		〃	
〃	23	〃	2—1	第18層		〃	52	〃		第18層	
〃	24	〃	2—1	第44層		〃	53	〃	2—4	第54層	口径29.7
ＫⅦ群A類	25	〃	2—2	第54層		〃	54	〃	2—4	〃	
〃	26	〃		第58層		〃	55	〃		〃	
〃	27	〃		第53層		〃	56	〃	2—4	〃	
〃	28	〃	2—2	〃	口径23.2	〃	57	〃	2—4	第45層	
〃	29	〃	2—2	第58層	口径28	〃	58	〃	2—4	第58層	口径19

群・類	遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	備考（cm）	群・類	遺物番号	挿図番号	図版番号	出土地点	備考（cm）
KⅧ群B類	59	8		第58層		BⅡ群	88	10		第45層	
〃	60	〃		〃	口径29	〃	89	〃		第44層	
〃	61	〃	2—4	〃		〃	90	〃		第47層	
〃	62	〃		第54層	口径21.5	〃	91	〃		不　明	
〃	63	〃		〃		〃	92	〃	3—1	第70層	口径30.5
〃	64	9		第58層	口径31	〃	93	〃	3—1	第39層	口径16.3
〃	65	8		第54層		〃	94	〃		第54層	
〃	66	9	2—4	第58層		〃	95	〃		第18層	
〃	67	8		第45層		精製Ⅰ群	96	11		〃	口径28
〃	68	9		第58層		〃	97	〃		第45層	口径36
〃	69	〃	2—4	〃		〃	98	〃	3—2	第44層	口径17.3
〃	70	〃	2—4	〃		精製Ⅱ群	99	〃		第18層	口径29.5
後期の底部	71	〃		第45層	底径7.5	〃	100	〃		〃	口径26.1
〃	72	〃		第54層	底径6	〃	101	〃		第47層	
〃	73	〃		〃	底径6	〃	102	〃		第46層	口径31
〃	74	〃		第18層	底径7.3	粗製Ⅰ群	103	12		第45層	口径26.8
〃	75	〃		〃	底径8.2	〃	104	〃		第18層	口径32
BⅠ群A類	76	〃	3—1	第54層		〃	105	〃		第45層	口径26
〃	77	〃	3—1	第45層	口径18.2	〃	106	13		第18層	口径23
〃	78	〃		第18層		粗製Ⅱ群	107	〃	3—3	第58層	口径23.2
〃	79	〃		〃		〃	108	〃		第18層	口径31
〃	80	〃		第44層		〃	109	〃		第45層	口径21.5
〃	81	〃	3—1	第18層		粗製Ⅲ群	110	14		第18層	口径20.8
BⅠ群B類	82	〃		第 1 層		〃	111	〃		〃	口径16
〃	83	〃		第38層		粗製Ⅳ群	112	〃		第14層	口径27.3
〃	84	10	3—1	第 1 層	口径24.1	〃	113	〃		第44層	
〃	85	〃		第45層		〃	114	〃		第17層	口径27.3
BⅡ群	86	〃		第18層		粗製Ⅴ群	115	〃		第53層	口径34
〃	87	〃		第45層							

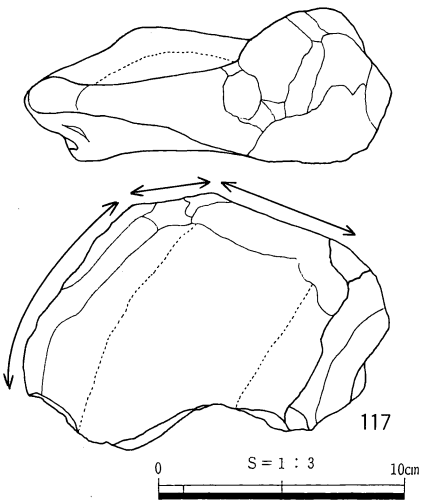
第２節　その他の遺物

土製品　116は第44層から出土した復口径4.2㎝を測る手ずくね土器で、口縁端部には刻み目が施される。同じ層から出土した縄文土器から後期中葉以降のものと考えられる。

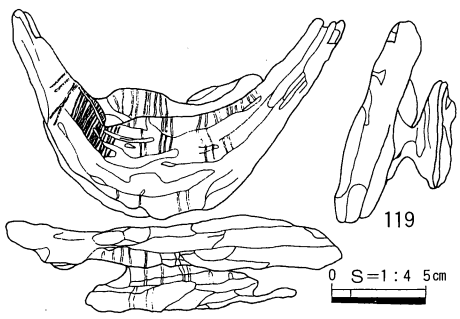


挿図15　土製品実測図

石　器　117は第58層から出土した石皿の欠損品で長さ11.5㎝、幅12.7㎝、厚さ6.0㎝を測る。材質は黒雲母角閃安山岩で、両面と側面に摺り面がみられる。同じ層から出土した土器から後期後葉のものと考えられる。

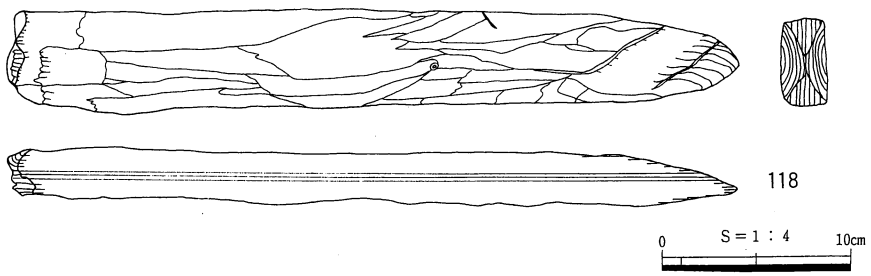


挿図16　石皿実測図



挿図17　高杯型木器実測図

木製品　118は第10層から出土した木杭下部の破片で、長さ39.5㎝、幅5.5㎝、厚さ3.2㎝を測る。下部約７㎝は差し込みやすいよう細かく加工が施される。119は第18層から出土した高杯型の木器と思われる。復口径長辺17.7㎝、短辺11.1㎝、高さ4.8㎝である。



挿図18　木杭実測図

第５章　島遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

島遺跡（鳥取県東伯郡北条町大字島小字五反田所在）は、北部の砂丘地帯と南部の丘陵地帯に挟まれ、砂丘後背地に形成されたラグーン地形が天神川等の堆積作用により形成された沖積低地のほぼ中央部に位置する。本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代の土器や石器・骨・貝・丸木舟などが検出されている。

今回の発掘調査では、縄文時代に形成されたと思われる旧河道が認められ、その埋積物中から流木と考えられる木材が検出された。今回の自然科学分析調査では、旧河道の形成時期に関する資料を得るために放射性炭素年代測定を実施するとともに、本遺跡周辺の古環境に関する情報を得ることを目的として花粉分析・材同定・種子同定を実施する。

１．試料

放射性炭素年代測定および材同定試料は、縄文時代の遺物包含層から検出された流木４点（試料番号１～４）である。また、花粉分析および種実遺体試料は、河道１の底部に認められた第55層荒砂混小石やれき層から採取された１点（試料番号５）である。この第55層は摺鉢状の掘り込み内に埋積した砂層であり、発掘調査所見では水さらし遺構と推測される。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

水でよく洗浄して表面の異物を取り除き、乾燥して粉砕後、水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返す。次に塩酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン３mℓ（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して３mℓとする）にシンチレターを含むベンゼン２mℓを加えたものを測定試料とする。

測定は、１回の測定時間50分間を20回繰り返す計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定する。

なお、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

（2）材同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（3）花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10 gの試料について塩酸処理、水酸化カリウム処理、篩別（250 μm）、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート前面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位的分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。また、図表中で複数の種類をハイフォン（—）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（4）種子同定

試料約300 ccについて、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して泥化させる。0.5 mmの篩を通して残渣を集め、双眼実態顕微鏡で観察して種実遺体を抽出・同定する。

3．結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を挿表4に示す。測定の結果、約2,700～3,000年前の測定値が得られる。

挿表4　放射性炭素年代測定および材同定結果

試料				年代値	誤差		Lab No.
試料番号	出土層	質	樹種	年前	＋	－	
1	19	木材	ケヤキ	3,060	200	200	PAL-160
2	15	木材	クリ	2,900	200	200	PAL-154
3	6	木材	クマシデ属イヌシデ節	2,740	190	190	PAL-155
4	52	木材	クスノキ科	2,770	260	250	PAL-161

注．(1)年代値：1,950年を基点とした値．

(2)誤差：測定誤差2σ（測定値の95％が入る範囲）を年代値に換算した値．

(3)ＰＡＬ：パリノ・サーヴェイ株式会社で測定した番号．

（2）材同定

結果を挿表4に示す。試料は、いずれも落葉広葉樹で4種類（クマシデ属イヌシデ節・クリ・ケヤキ・クスノキ科）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クマシデ属イヌシデ節（*Carpinus subgen. Euarpinus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4（時に10以上）個が複合する。横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

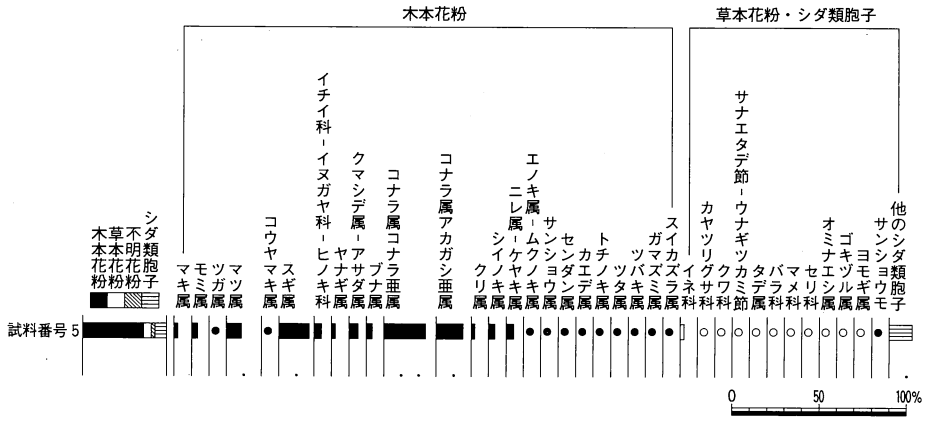
環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～30細胞高。しばしば結晶を含む。

・クスノキ科（Lauraceae sp.）

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独まれに2～3個が放射方向に複合する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

挿表5　花粉分析結果

種　類 ＼ 試料番号	5
木本花粉	
マキ属	4
モミ属	5
ツガ属	1
マツ属	19
コウヤマキ属	2
スギ属	36
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	7
ヤナギ属	3
クマシデ属－アサダ属	10
ブナ属	5
コナラ属コナラ亜属	49
コナラ属アカガシ亜属	31
クリ属	3
シイノキ属	7
ニレ属－ケヤキ属	10
エノキ属－ムクノキ属	1
サンショウ属	1
センダン属	1
カエデ属	1
トチノキ属	2
ツタ属	2
ツバキ属	2
ガマズミ属	1
スイカズラ属	1
草本花粉	
イネ科	8
カヤツリグサ科	2
クワ科	2
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1
タデ属	1
バラ科	1
マメ科	1
セリ科	1
オミナエシ属	1
ゴキヅル属	1
ヨモギ属	2
不明花粉	8
シダ類胞子	
サンショウモ	2
他のシダ類胞子	36
合　計	
木本花粉	204
草本花粉	21
不明花粉	8
シダ類胞子	38
総計（不明を除く）	263



挿図19　花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

（３）花粉分析

結果を挿表５・挿図19に示す。木本花粉では、スギ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属・クマシデ属－アサダ属・シイノキ属・ニレ属－ケヤキ属ナドを伴う。草本花粉はイネ科・カヤツリグサ科・サンショウモなどが僅かに検出される程度で、総花粉・胞子に対して占める割合が低率である。

（４）胞子同定

検出された種類・形態的特徴および検出個体数を以下に記す。

・コナラ属（*Quercus* sp.）　ブナ科

果皮の破片が23個検出された。１㎝程度の細片が多いが、大きなもので２㎝程度。茶褐色で薄く、表面には光沢がある。写真のものは、「座」についていた場所にあたる円形でざらつく部分が残っている。全体的に保存が悪くもろいため、水洗選別の際に壊れたものが多い。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が１個検出された。大きさは３㎜程度。黒色でＹ字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・エゴノキ属（*Styrax* sp.）　エゴノキ科

核が１個検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。大きさは１㎝程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に３本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・スゲ属（*Carex* sp.）　カヤツリグサ科

果実が１個検出された。灰褐色で大きさ１㎜程度。側面観は紡錘型で３陵がある。表面は柔らかく、亀甲状の表皮細胞が密に配列している。先端は細くなり長くのびる。

・キランソウ属（*Aiuga* sp.）　シソ科

果実が１個検出された。灰白色、卵球状で大きさは２㎜程度。表面には荒く不規則な網目状隆起がみられる。下端に大きな「へそ」が存在する。

４．河道の埋積時期および周辺植生

旧河道内部から検出される流木の放射性炭素年代測定では、試料番号１が約3,000年前で最も古い年代値であるが、その上位から出土する木材が2,900年前、最上層から出土する木材が2,740年前の測定値が得られている。さらにこれらの土層を削って形成される旧河道から出土する流木が2,770年前の測定値となっている。以上のことから、本河道の形成時期は約2,900～2,700年前の縄文時代後晩期以降に埋積したと考えられる。また、この旧河道で得られた植物化石群集は、旧流路集水域から後背丘陵地までの比較的広い範囲の植生を反映していると想定される。

花粉化石でみると、スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属が多産する。このうち、アカガシ亜属が暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であり、この他にも暖温帯を中心に分布する種類が検出されている。したがって、縄文時期後晩期以降になると調査地点周辺は暖温帯性の気候下に属しており、ナラ・カシ類およびスギを中心とした森林が成立していたと推定される。ただし、スギは流水に沿う場所であるならば低地においても生育することが可能であるため、低地に分布していた可能性もある。また、花粉化石で検出されるヤナギ属、流木のクマシデ属イヌシデ節・クリ・ケヤキ・クスノキ科などは、旧河道周辺の植生を反映しており、そのような場所に生育していた母植物に由来する化石が流下・堆積したものと考えられる。

このように縄文時代後晩期以降になると、本地域には暖温帯性の森林が成立していたと推定される。本地域では、宍道湖・中海・弓ヶ浜のボーリングコアの花粉分析によると、約5,000年前以降になるとアカガシ亜属とともにコナラ亜属などが多産する群集が得られている（大西、1977；大西ほか、1990；大西ほか、1993）。また、本遺跡で既に実施された花粉分析によると、縄文時代後期～晩期になるとシイ林からカシ林へと変化し、気候要因の変化に伴いスギ属などが増加するとされている（安田、1983）。鳥取市桂見遺跡では、アカガシ亜属・シイノキ属を中心とした照葉樹林が成立していたとされている（三好、1978）。このように本遺跡周辺の日本海沿岸部地域には、暖温帯性の植生が広がっていたと推定される。ただし、これらの地域で全く同様な植生が存在していたとは考えにくく、場所により多少異なっていたと思われる。したがって、今後とも周辺地域で花粉化石群集の変遷様式を明らかにし、その上で地域的な比較検討を行うことで、古植生についてより詳細に検討することが可能になると思われる。

なお、「水さらし遺構」の可能性があるとされる摺鉢状の掘り込みからは、種子同定により複数の種類が認められたが、その中の一種にコナラ属が認められた。コナラ属の調理で「水さらし」を行う行程は「あく抜き」や「虫殺し」などを行うためであり、重要な行程の一つである。コナラ属は、種類によって「あく」の種類が異なり、ほとんど「あく抜き」が不要なイチイガシや、灰汁などのアルカリ処理が必要なクヌギなどさまざまである。

しかし、今回検出されたものは保存が悪く、種類の特定は難しい。コナラ属の中には、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属が存在しているが、今回の花粉分析の結果をみる限りでは、両種類とも後背山地に生育していたと考えられる。したがって、いずれの種類にしろ周辺から入手しやすい環境にあったと思われる。

〈引用文献〉

石河寛昭（1977）「最新液体シンチレーション測定法」。南山堂、189ｐ。

大西郁夫（1977）出雲海岸平野下第四紀堆積物の花粉分析。地質学雑誌、83、ｐ.603－616。

大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群。島根大学地質学研究報告、９、ｐ.117－127。

大西郁夫・木寺將仁・千田信夫（1993）中海南部における最上部完新統の花粉群。島根大学地質学研究報告、12、ｐ.45―52。

三好教夫（1978）桂見遺跡（鳥取県）の花粉分析。「桂見遺跡発掘調査報告書」、ｐ.71－75、鳥取市教育委員会。

日本化学会編（1976）同位体、年代測定。「新実験化学講座１０　宇宙地球科学」、丸善、ｐ.337－353。

富樫茂子・松本英二（1983）ベンゼン－液体シンチレーションによる14Ｃ年代測定法。地質調査所月報、34、ｐ.513－527。

安田喜憲（1983）島遺跡の花粉分析。北条町埋蔵文化財報告書２「島遺跡発掘調査報告書」、ｐ.69－73、北条町教育委員会。

第6章　ま　と　め

昭和５７年の調査に続いて２例目にあたる今回の発掘調査では、調査区域において北端の海抜約２mを最深部に南に向かって地山が上昇する地形を呈し、海抜約２～５mを図る堆積層から、中期から晩期にかけての縄文土器、木器、石製品等の遺物、そして木の実のさらし場遺構が確認された。また、今日までの調査区域の土地形成において幾度かの河川による沖積作用を示す土層状況が観察された。第３章調査の概要で触れたように調査区内には４本の河道の存在が確認でき、層序及び自然科学分析結果から河道４が一番古く、次に河道３、新しいものとして河道１・河道２が形成されたと推測される。河道１と河道２については、河道２から遺物等の出土がなく、河道１との層序比較でも明確に形成順を表す成果が得られなかったため判断できなかった。形成年代について考えてみると、本調査区の最深部で最も形成段階が古い河道４の河床にあたる第18層から新しい年代の遺物として縄文時代晩期の土器が出土していること、上層部においても縄文時代晩期以降の遺物の出土がみられなかったこと、そして河道内採取された流木の放射性炭素年代測定結果から、本調査区内の４本の河道を含んだ遺物包含層が示す海抜２～５mの堆積は、縄文時代晩期に形成されたと推測できる。また、縄文時代中期から晩期の幅広い年代にかけての土器が混在して出土する層が多かったことは、摩耗が著しい遺物がみられた点からも、河川の流水による遺物の移動・混在があったのであろう。

次に、島遺跡周辺地域の当時の様子について昭和５７年の調査結果を併せて触れてみることにする。昭和５７年に行われた調査では、今回の調査区を基準として約12mm南西にＡ地区、約９m西にＢ地区、約40m南にＣ地区の３カ所を調査区として設定し、いずれも海抜約１mで地山が確認されていることと、今回の調査区内にみられた地山の海抜変化状況から、安定した地盤（地山）の微高地が今回の調査区南側に存在していたと考えられる。さらに、この微高地に向かって西側丘陵部から尾根が張り出していることを考慮して当時の地形を推測すれば、当地は北東－南西軸にのびる尾根の一角を形成するものだったのではないだろうか。また、木の実のさらし場遺構（河道１）、遺物密集出土層（河道１、河道４）が河道の南岸に集中して確認したことから、ここで縄文人の生活が営まれており、当時の温暖な環境のもと、水辺周辺において、今回確認された木の実のさらし場から推測できる木の実の採取、昭和５７年の調査結果にみられる狩猟を行っていたのであろう。

今回の調査では遺物包含層が示す海抜高度が高かったためか縄文時代前期から中期にかけての土器がほとんどみられなかったが、逆に晩期にあたる新たな形態の土器が確認され、島式編年で示される時期範囲がさらに広がりを見せた。今後行われる調査でも今回の成果を踏まえ、さらに検討を加えていくことでこの地域の文化の解明につなげていきたい。

報告書抄録

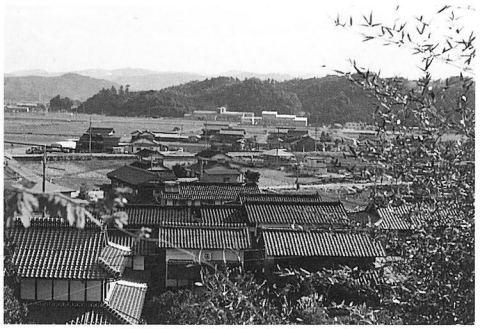
ふりがな	しまいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	島遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	第2集
シリーズ名	北条町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	25
編著者名	清水　直樹
編集機関	北条町教育委員会
所在地	〒689-2111　鳥取県東伯郡北条町土下112　TEL 0858－36－3111
発行年月日	西暦1998年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
島遺跡	北条町島字五反田	31366		35° 28′ 20″	133° 49′ 02″	1996 12～ 1997 03	200	一般国道313号道路改良工事

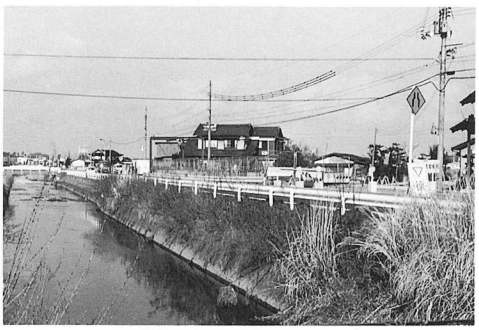
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島遺跡	遺物散布地	縄文時代中期～晩期	木の実のさらし場	縄文土器	

図　　版

図版1

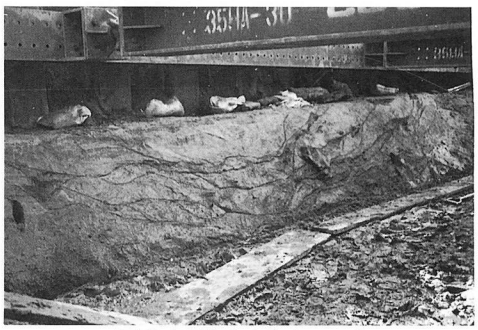


調査区遠景（西から）

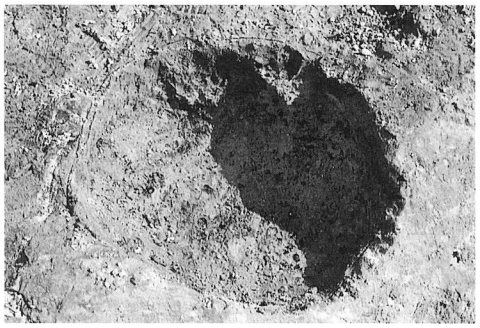


調査区近景（南西から）

河道１（北から）

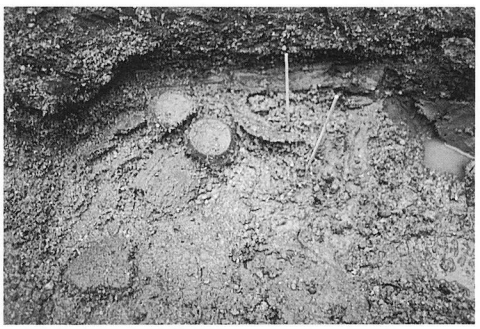


河道１断面（北東から）

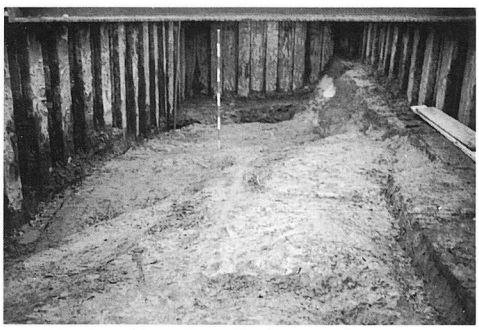


木の実のさらし場（北東から）

河道４（南西から）

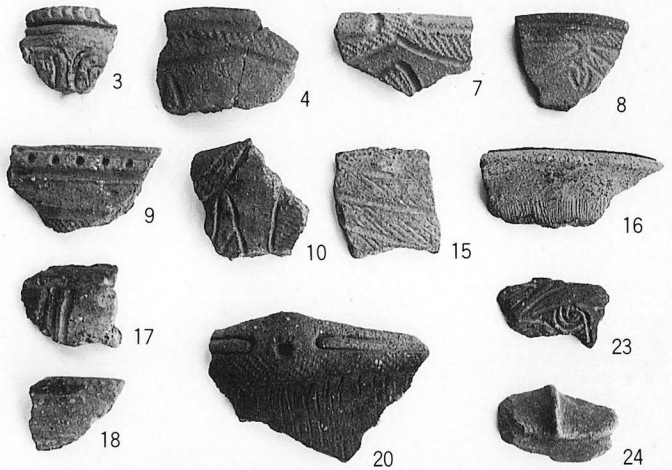


河道４（第18層）出土状況（北東から）

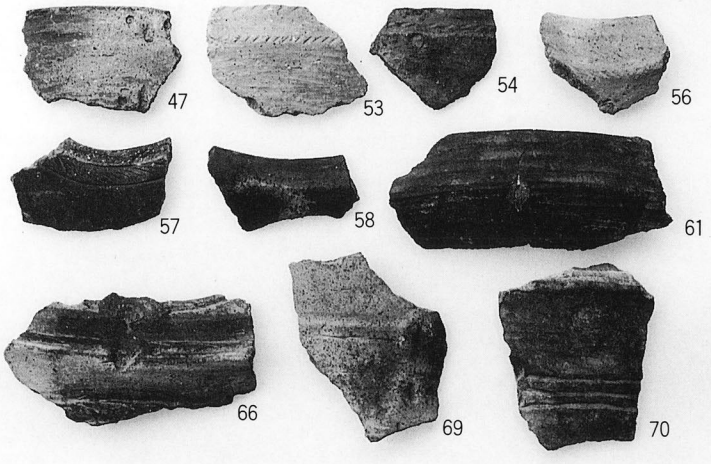


調査区完掘（南から）

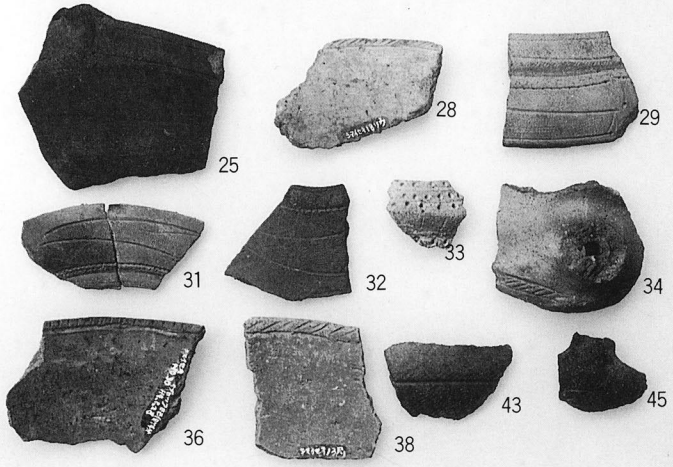
③ 縄文土器K Ⅶ群B類



① 縄文土器C Ⅳ群～K Ⅴ群



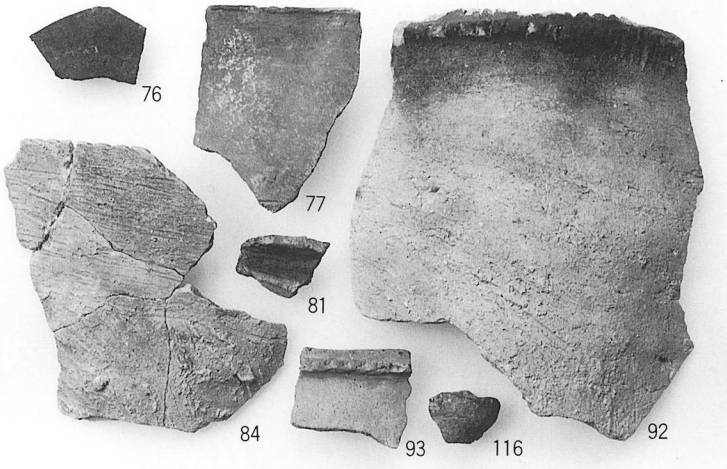
④ 縄文土器K Ⅷ群A類～B類



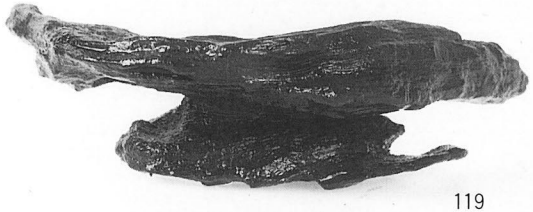
② 縄文土器K Ⅶ群A類～B類

図版2

③ 無文粗製縄文土器Ⅱ群



① 縄文土器B Ⅰ群～B Ⅱ群・土製品

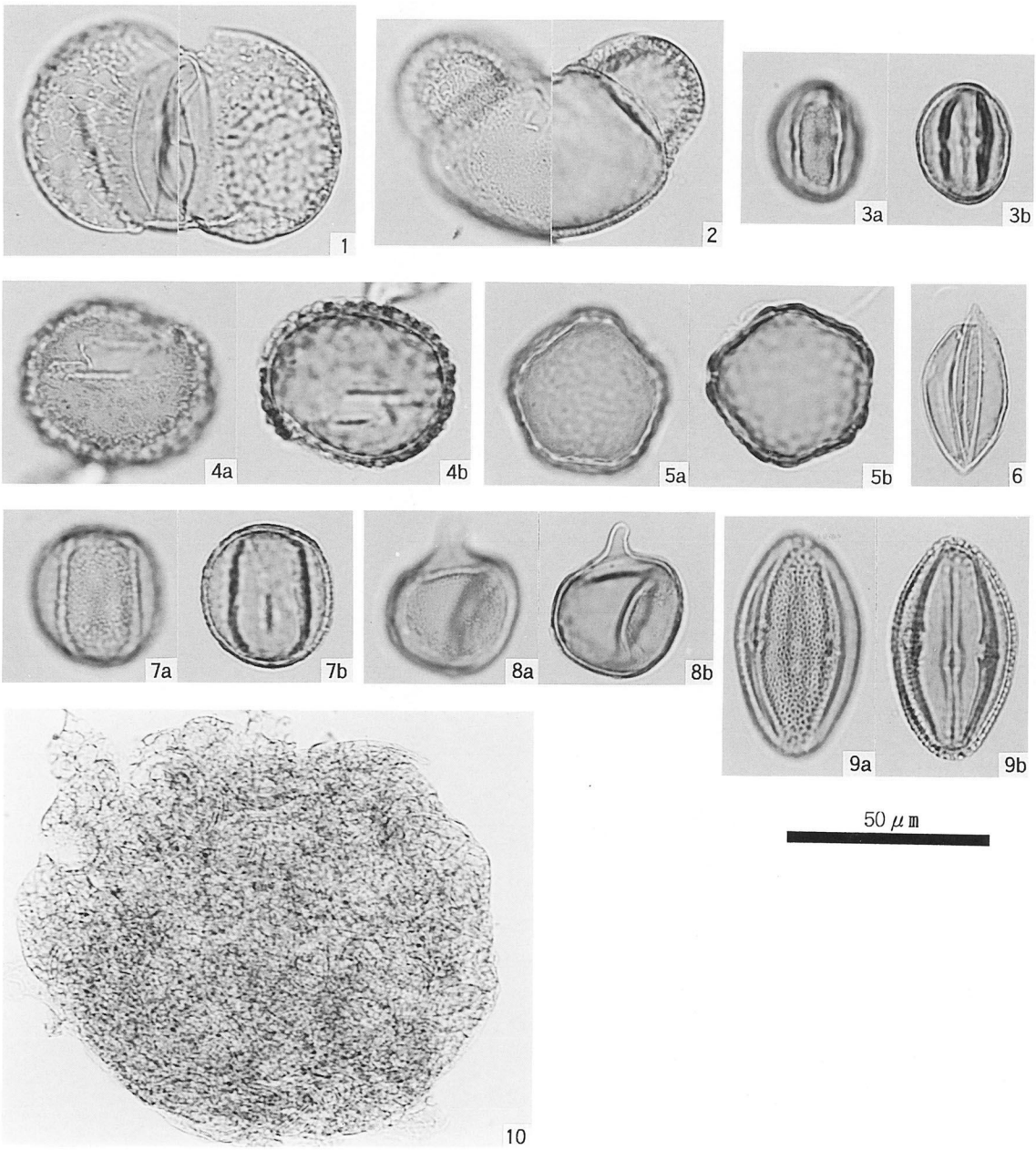


④ 高杯型木器

② 無文精製縄文土器Ⅰ群

図版3

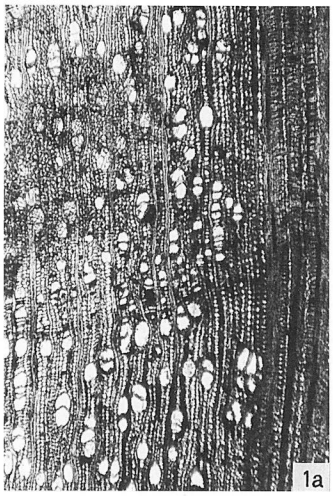
図版4

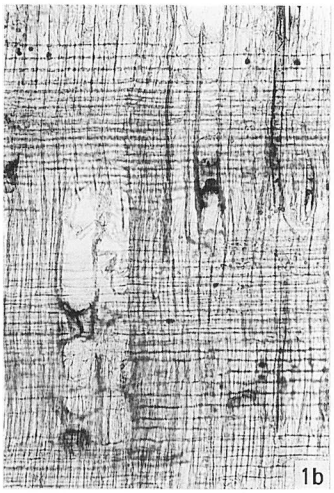


1. マキ属(試料番号5)
2. マツ属(試料番号5)
3. コナラ属-アカガシ亜属(試料番号5)
4. コウヤマキ属(試料番号5)
5. ニレ属-ケヤキ属(試料番号5)
6. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(試料番号5)
7. コナラ属-コナラ亜属(試料番号5)
8. スギ属(試料番号5)
9. ツタ属(試料番号5)
10. サンショウモ(試料番号5)

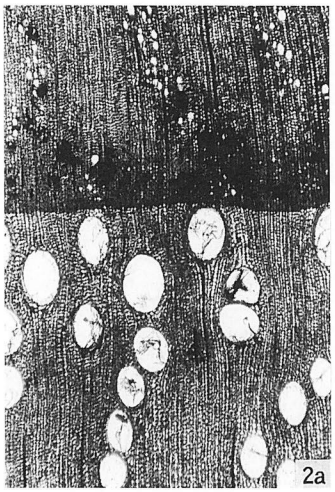
花粉の顕微鏡写真

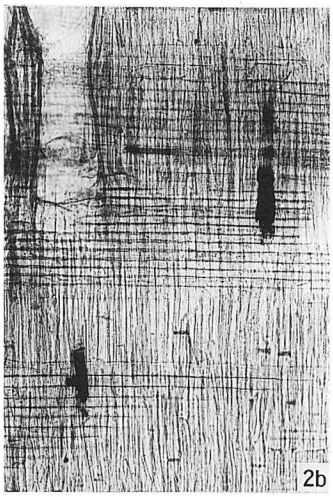
図版5


1a

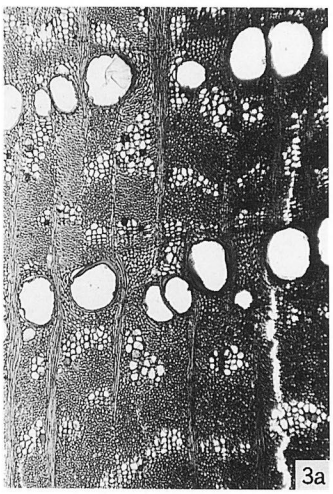

1b

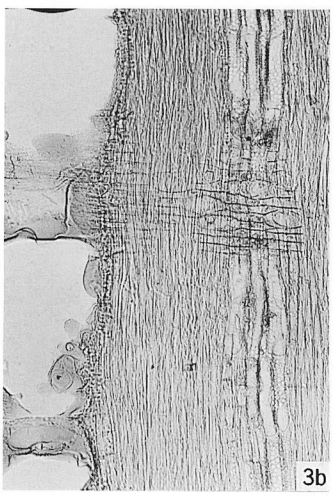
1c

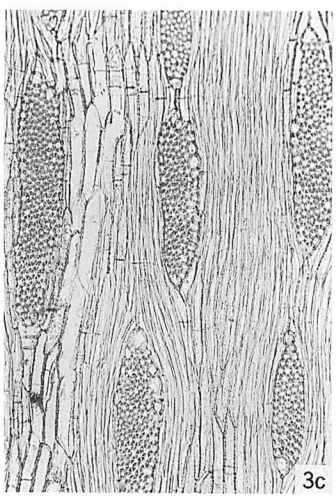

2a


2b

2c


3a


3b

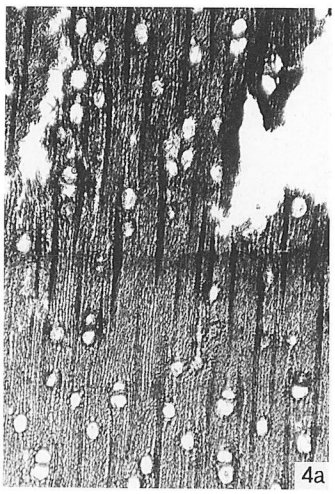

3c

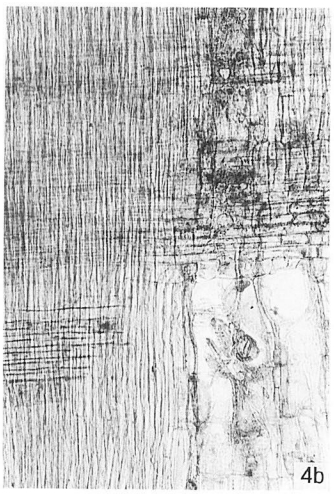
1. クマシデ属イヌシデ節(試料番号3)
2. クリ(試料番号2)
3. ケヤキ(試料番号1)
a：木口，b：柾目，c：板目

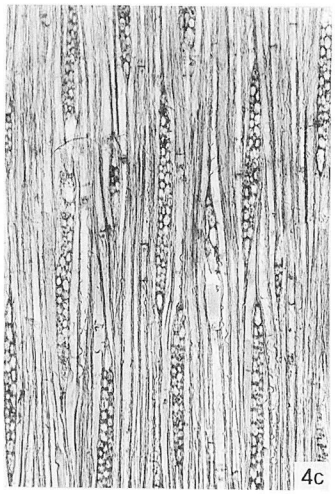
200μm：a
200μm：b, c

木材の顕微鏡写真

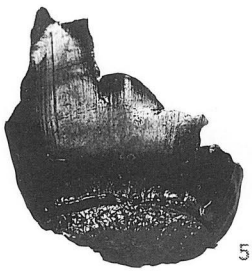
図版6


4a


4b

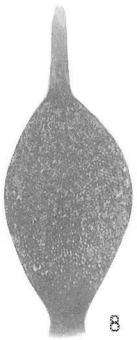

4c

(4) 200μm：a
200μm：b, c


5

6

7


8

9

2cm (5,6)　4mm (7)　2mm (8,9)

4. クスノキ科(試料番号4)
　a：木口，b：柾目，c：板目
8. スゲ属(試料番号5)
7. アカメガシワ(試料番号5)
6. エゴノキ属(試料番号5)
9. キランソウ属(試料番号5)
5. コナラ属(試料番号5)

木材及び木の実の顕微鏡写真

平成１０年３月印刷
平成１０年３月発行

北条町埋蔵文化財報告書２５

島遺跡発掘調査報告書第２集

編集　鳥取県東伯郡北条町土下112
発行　北条町教育委員会

印刷　有限会社矢積印刷
製本　鳥取県倉吉市宮川町2-36